

# 「未識別民族」のアイデンティティはどう構築されてきたのか：貴州省織金県の穿青人(チュアンチンレン)を例に

著者	江 軍哲
著者別名	JIANG Junzhe
ページ	1-66
発行年	2020-03-24
学位授与年月日	2020-03-24
学位名	修士(国際文化)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00023380">http://hdl.handle.net/10114/00023380</a>

# 修士論文

指導教員 曾士才 教授

論文題名

「未識別民族」のアイデンティティはどう構築されてきたのか

——<sup>しよくきん</sup>貴州省織金県<sup>チュアン チン レン</sup>の穿青人を例に——

国際文化 研究科 国際文化 専攻修士課程

氏名 江軍哲

# 論文要旨

所属: 国際文化研究科国際文化専攻

氏名: 江軍哲

中国では 56 民族以外のエスニックグループが存在している。彼らは「未識別民族」と呼ばれ、何らかの理由で民族識別調査組に独自の「民族」として認定されなかったエスニックグループである。彼らは、独特なアイデンティティを持っているため、国から一個の少数民族として認められないにも関わらず、自らは少数民族であると主張している。本研究の研究対象となる穿青人もまさに代表的な未識別民族の 1 つである。

青色<sup>1</sup>の服装を着ているため、周囲の民族からは「穿青人」と呼ばれたが、彼らのルーツをめぐってはさまざまな見解がある。費孝通 (1955) による「漢族の末裔説」や『重新識別報告』(1986) による「土人」説、楊然による「融合」説は代表的な言説である。

本論文は、このような穿青人の民族成分を判断するというより、「穿青人のアイデンティティの構築」について議論し、穿青人アイデンティティの形成や発展を明らかにしていく。

費による「穿藍人<sup>チユアンランレン</sup>と<sup>2</sup>差をつけたいため、自分たちの服飾の色を強調した」(費、1980、p152) の主張以来、楊も周も「穿青人の服装がアイデンティティの維持に影響した」と同様の論を述べている。しかし、その観点はアイデンティティ構築に影響する要素の可変性を無視しているように思える。

では、歴史において、穿青人のアイデンティティはいかに構築されてきたのか。それを解明するために、文献調査だけでなく、2018 年 9 月及び 2019 年 1 月に、筆者は貴州省織金県を中心に、<sup>い な</sup> 以那鎮、<sup>けい か</sup> 桂果鎮を含め、2 回のフィールドワークを実施した。この論文は、2 回の調査で得られたものを踏まえ、穿青人アイデンティティの構築過程を明らかにして、自分が提出した仮説「現在、『服装』より、<sup>ウシエンシエン</sup> 信仰である『五顛神』こそが、穿青人アイデンティティを維持させる要素である」ということを検証していく。

第一章ではまず、穿青人の概況 (人口、風俗、居住地など) を述べるとともに、穿青人のルーツに関する 3 つの言説を取り上げ、彼らのルーツについて分析していく。特に、穿青人の名称の変遷を切り口に、穿青人のルーツや発展過程を分析する。

第二章ではまず、歴史における穿青人の民族成分を紹介する。第一章の最後で明らかにした穿青人の発展過程を背景に、違う時期ごとの国家の政策や当時の人々のアイデンティティの方向性をまとめ、穿青人の民族成分の変化過程を説明する。さらに第二節の「中華人民共和国成立後の穿青人民族成分問題の経緯」では、単に各時期の穿青人に対する政策を紹介するのみならず、民族優遇政策などにも言及し、総合的に分析する。最後は穿青人内部の認識について、インタビュー結果や先行研究を踏まえて紹介していく。

第三章は、穿青人アイデンティティに影響する諸要素、いわゆるアイデンティティシンボルについて紹介する。服や信仰を紹介し、仮説を検証すると同時に、歴史における穿青人アイデンティティに影響する諸要素の重要性について考察した。

<sup>1</sup> 中国の青色は、黒に近い色である

<sup>2</sup> 後に来た漢族を指す、彼らは、藍色の服を着ているため、穿藍人と呼ばれている

このように、今回の研究では、先行文献を参照し、穿青人のルーツを分析し、民族の二重性が形成された理由を明らかにした。その上で、穿青人アイデンティティはいかに構築され、集団の発展により構築の核はどう変化してきたのかを解明した。その変化の過程は、以下のようなものである。

穿青人アイデンティティは、主に五頭神により構築された。その後外部と対抗する中で、よりわかりやすい服装がエスニックシンボルとされ、他民族との関係性により、時には漢族としてのアイデンティティを強化し、時には非漢族としてのアイデンティティを強化した。異なる時期においては違う方向性が現れたとしても、一個の集団であるという認識は強まった。外面的な特徴である服装は時代により影響力が上昇したり、低下したりするが、内面的な特徴である五頭神はずっと彼らのアイデンティティに影響し続けてきた。現在、服装の影響力が低下することにより、穿青人のアイデンティティを維持させているのは、信仰である五頭神だ。

しかし、参与観察の時間的、空間的制約があったため、最後に出したその結論は決して間違いがないとは言いきれない。また、他の民族と同様に、現代化に伴い、穿青人の文化は衰退してきた。今後、五頭神と服装の2つのエスニックシンボルとも消滅したら、その時穿青人のアイデンティティは維持できるのかも一つの課題となっている。

# 「未識別民族」のアイデンティティはどう構築されてきたのか

## ——貴州省<sup>しよくきん</sup>織金<sup>チュアン</sup>県の穿青<sup>チン</sup>人を例に——

### 目次

序章	1
はじめに 「青」の服を着る人々	1
第一節 「未識別民族」の形成及び位置づけ	1
第二節 穿青人に関する研究	3
第三節 研究目的及び各章の内容	5
第一章 穿青人の基本状況	7
第一節 人口分布	7
第二節 織金県について	7
1. 地理状況	9
2. 織金県における穿青人の分布	10
第三節 穿青人の由来に関する言説	11
1. 「漢族の末裔」説	11
2. 「土人」説	13
3. 「融合」説	15
4. 「穿青人」の名の由来	16
第二章 穿青人の民族成分	23
第一節 穿青人の民族成分のぶれ	23
1. 穿青人「非漢非蛮」の特性	23
2. 『調査報告』にみる穿青人の漢族性	24
3. 『重新調査報告』にみる穿青人の非漢族性	25
第二節 中華人民共和国成立後の穿青人民族成分問題の経緯	26
1. 二回の民族識別工作	26
2. 2005年の公安部による「指示」	28
3. 穿青人に対する政策の動き—2014年以降—	30
第三節 穿青人内部の認識	33
1. 「穿青人」としての自己認識	33
2. 「漢民族」としての自己認識	34
3. 「民族成分」にこだわりのないという考え方	34
第三章 穿青人アイデンティティの構築	36
第一節 服装	36
1. 穿青人服装の特徴	36
2. 「服装」の穿青人アイデンティティへの影響	41
(1) 穿青人が形成された時期	41
(2) 穿藍人との差異を強調する時期	43
3. 服装の現状	43
第二節 信仰	45
1. 穿青人の <sup>ウシエンシエン</sup> 五頭神の伝説	45

2. 穿青人の五頭神の祭祀.....	46
(1) 祭祀の開催時間と開催目的.....	46
(2) 祭祀の主体を担う「道士」.....	46
(3) 祭祀の流れ.....	47
3. 五頭神信仰の穿青人アイデンティティへの影響.....	53
<b>終章</b> .....	54
1. 結論.....	54
2. 残された課題.....	55
<b>参考文献</b> .....	57
<b>添付資料</b> .....	59

## 序章

はじめに 「青」<sup>チン</sup><sup>1</sup>の服を着る人々

中国西南部の貴州省には、「穿青人」と呼ばれるエスニックグループが存在している。その名の由来は、「青」の服を着ているからである。清咸豊<sup>かんぽう</sup><sup>2</sup>『安順府誌・地理志・風俗・十一』は「…里民<sup>リミンズ</sup>子…青色の服を尊<sup>ひつまつ</sup>んだいる、婦人は纏足<sup>3</sup>しない…」と記載しているが、それは歴史上にずっと定着して来た名称ではない。第1章で紹介するように、時期により、彼らの名称も変わってくる（文献上では「土人」<sup>4</sup>「里民子」などの名称が挙げられる）。

現在、穿青人は貴州省畢節<sup>ひつせつ</sup>、安順地域を中心に居住しており、第5回人口調査（2000年）の結果によると、貴州省省内において、「穿青人」は約67万人で、貴州省総人口の1.7%を占めている。風俗や言語は周囲の他民族と異なり、民族独自の特徴を持っているため、彼らは、自らを単一の少数民族だと主張している。しかし、その主張は正式に認められず、彼らは未だ「未識別民族」として扱われている。

このように、国から単一の民族として認められていない穿青人は、長年に亘って、どのように自分のアイデンティティを構築してきたのだろうか、そして、各時期におけるアイデンティティ構築の核はなんだろうか。私は、これらの問題を解明するために、研究を進めてきた。

では、穿青人アイデンティティの構築過程に入る前に、まずは「未識別民族」の概念を述べておこう。

### 第一節 「未識別民族」の形成及び位置づけ

周知のように、中国は漢民族と55個の少数民族からなる多民族国家である。しかし、それは必ずしも歴史的に定着していたものではない。中華人民共和国が建国した当初、国家から認定されていたのは9つの民族<sup>5</sup>だったが、1950年から1954年までは38になり、1978年にはさらに16民族が識別され、認定された少数民族数が54になった。1979年ジノ一族が識別されたことにより、中国の少数民族は55になった。松本光太郎（1995）が言ったように、中国の55民族は国家の識別政策により生じたものであり、その識別の過程は、国家が民族の認知を行い、彼らに民族のステータスを与える政治的な行為である。その行為は、民族識別工作<sup>6</sup>と呼ばれる。毛里和子（1998）は、民族識別工作を通じて、フロンティア地域の原住民を中華人民共和国の「人民」として統合できたと指摘した。また、識別工作は、区域自治政策や人民代表大会の選挙など、民族優遇政策の実施に重要な意味がある。

このような重要な役割を持っている民族識別工作は、エスニックグループ側からの自己

---

<sup>1</sup> 中国の青色は、黒に近い色である。

<sup>2</sup> 西暦1850年-1861年。

<sup>3</sup> 幼児期より足に布を巻かせ、足が大きくならないようにするという、かつて中国で女性に対して行われていた風習をいう（ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%BA%8F%E8%B6%B3> 最終アクセス2019年10月15日）。

<sup>4</sup> 土人は、当時漢族の村以外の住民を指す、一種の蔑称でもある。

<sup>5</sup> モンゴル族、回族、チベット族、ウイグル族、ミャオ族、彝族、ヤオ族、朝鮮族、満州族。

<sup>6</sup> このような民族識別工作は、後の民族区域自治制度の土台にもなっている。

申告に基づき、言語、居住地、経済生活や共同意識などの要素（スターリンによる民族の4つの特性<sup>7</sup>）を総合的に分析し、「科学的」にエスニックグループを「民族」であるか否かを判断する過程である（費、2014、p5）。しかし、結果から見れば、識別工作の判断基準は必ずしも客観的なものではない。ここではジノ一族を例に説明する。1979年の公式説明によれば、ジノ一族は、①言語はイ語に近いが独自の特徴がある、②経済、文化などの面で固有の特徴を保持している、③民族自身の願望の3つによって、単一の民族に認定された。それに対し、毛里（1998）は、「前二者は絶対的な根拠とは言えず、結局決め手になったのは第三番目の『民族の願望』である」と指摘した（毛里、1998、p63）。毛里はジノ一族が一個の民族として認定されたのには、民俗学者の杜玉亭<sup>とぎよくてい</sup>の熱心な支持と何らかの関係があるかもしれないとしている。このように、民族識別工作は、必ずしも客観的な判断基準が存在するのではなく、政治、社会関係など諸事情も影響する。

客観的ではないと指摘されたこと以外にも、漢族の認識に基づき「創造」された民族もあるという指摘も存在する。稲澤努は「彝族に関しても……むしろ、革命以前の学者たちが書いた著作や中国人にとっての民俗カテゴリーの中に、既に大部分存在している特徴を正当化し、強化するために用いられたとされ、革命以前から漢族によって書かれてきた『歴史』の中のカテゴリーが『民族』とされたのである」と指摘した（稲澤、2016、p50）。それはまるで鈴木正崇が言ったように、「結果的には、当事者の主観は反映されず、調査者の判断による『客観的』な共通性が識別の基準とされ、内部の細かな差異は考慮されないうで、外部から規定されるままに民族が確定された」（鈴木、1993、p223）。民族当事者自身の意見を無視し、調査者側の都合で民族を「識別」するのも、民族識別工作中における問題点の1つである。

このように、スターリンによる民族の定義の4つの基準に従ったとされる民族識別工作は、実施過程において多様な不合理なことがあり、それらのことにより、1980年代に終わった民族識別工作は、決して完璧なものとは言えず、むしろ、様々な問題点が残されているとも言える。本論文の対象になる「未識別民族」も、民族識別工作の残された問題の1つと考えられる。

未識別民族とは、何らかの理由で民族識別調査組に単一の民族として認定されなかったエスニックグループである。彼らは、独自のアイデンティティを持っているため、自らは単一の少数民族であると主張している。筆者は未識別民族を以下の3パターンに分けてみた。まずは、政治的な理由によって、未識別にされたエスニックグループ。例として挙げられるのはチベットに居住している僇人<sup>デンレン</sup>である。人口過少やパンチェン・ラマ10世から反対されたため、僇人の民族成分は「その他」（つまり未識別民族）に分類された（莫非、2008）。次に、複数の調査組の「識別結果」が異なり、中央政府の決断で他民族の下位集団にされたが、その結果と自己認識とが異なったため、「未識別」になったエスニックグループ。本研究の研究対象である貴州省の穿青人は、まさに典型的な例である。彼らは費孝通により漢族の末裔と認定されたが、その結果に納得できず、何度も再調査を申告した。80年代には少数民族であると識別されたが、最終には中央政府の決断により、「その他」に分類された（第一章第三節参照）。最後のは、集団内部の意見は無視され、調査者の都合で他の民族に分類され、他民族の「下位集団」になったエスニックグループ。そ

<sup>7</sup> 共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の民族文化特性に表れた共通の心理素質（民族意識）。



の例の 1 つとして<sup>モンレン</sup>摩梭人があげられる。四川省に住んでいる摩梭人はモンゴル族に分類されたが、雲南省側の摩梭人はナシ族に分類され、同じ民族でありながら、居住地により異なる民族とされた（ハス額爾敦、2008）。しかし、摩梭人自身はその結果を認めず、抗議した結果、現在でも公式には単一の民族として認められてないが、身分証には「ナシ（摩梭）」として変更できる。

以上のように、「未識別民族」は民族識別工作における残された問題であり、何らかの理由で自らの意思が無視され、結局他の民族に分類されたが、それに強く反対した結果、政府が妥協して生じた名称である。では「その他」に分類された彼らは、「民族優遇政策」の対象になるのか。具体的な内容は第二章第二節で説明するが、結論から言えば、彼らも優遇政策の対象である。

「未識別民族」の 1 つである穿青人についての研究は、どうなっているのだろうか。

## 第二節 穿青人に関する研究

中国民族研究の重鎮である費孝通は、「中華民族多元一体論」の土台を作った人として知られている。1951 年に出版された『兄弟民族在貴州』の中で、費は穿青人について以下のように書いていた。

「…それ以外、人口が少ない少数民族も存在する。このような少数民族の中にも 2 つのパターンがある。1 つは…もう 1 つは、早い時期に（貴州省に）侵入した漢族軍隊である…彼らは、既に少数民族に同化されたため、後に来た漢族には同じ漢族として認められてない。そのため、現在は彼らを『少数民族』に分類した。このような『民族』は居住地域によって違う名前を持っている。例えば、南京人、里民子、穿青など」（費、1951、p9）

穿青人のことについてはあまり具体的に書いてないが、それは中華人民共和国建国以降、初めて「穿青人」という用語が出ていた研究資料であり、後述の 1980 年論文の土台にもなっている。

1980 年、費孝通は「關於我国民族的識別問題」で、穿青人は明代江西からの屯軍の末裔であると主張している。明代洪武年間、中央政府はミャオ族などの非漢族を「遠く<sup>かく</sup>竄れ」させるため、兵士を徴発し、<sup>ドン</sup>屯・<sup>バオ</sup>堡という軍事システムを設置した。屯はさらに、軍人からなる「軍屯」と庶民主体の「民屯」に分かれている。穿青人は、民屯の末裔であると指摘されている。つまり、穿青人は明代に貴州に移住してきた漢族の末裔であり、少数民族ではない。

2006 年、<sup>ようぜん</sup>楊然は博士論文「穿青人問題」において、文化、人口、言語、心理などの角度から穿青人を分析した。楊は、それらの分析に基づき、穿青人のルーツについて新たな論点を示している。彼は、現在の穿青人集団は、様々な集団が移住する中で、穿青人集団に入り、新たに構築された集団であると指摘している。楊によると、穿青人の内部は、明代からの移民もいれば、当地の「土人」も一部含まれている。いわゆる、移住と再移住の過程で、穿青人は他のエスニックグループを吸収し、今の穿青人になったとしている。例えば、居住地は穿青人と隣接している<sup>トンバオレン</sup>「屯堡人」は、かつては穿青人と同じく「里民」（ま

たは里民子)と呼ばれていた。楊然は、穿青人や屯堡人の中でも人数が多い存在である陳姓の家譜を比較し、彼らは同じ先祖を持っていることを確認した。楊によれば、穿青人の陳姓の一部は、元々屯堡人であり、移住の過程により穿青人になった。

一方、日本の文化人類学者である塚田誠之は屯堡人を研究している 1 人である。塚田 (1998) によれば、屯堡人は明代江南地域からの屯軍の末裔であり、その後、一部の屯堡人は彝族になり、一部の屯堡人はそのまま「屯堡人」と名乗っている。塚田は、屯堡人と彝族の関係から分析し、集団が漢族かどうかを判断する要因<sup>8</sup>を指摘した。彼の研究により、どの民族に分類されるのかは、「他者との民族間関係」、「国家の政策」と「当時の人々 (当事者) のアイデンティティの方向性」という 3 つの要因に影響されるという (塚田 1998、p72)。

以上 3 人の観点に基づき、穿青人を分析してみると、このような仮説が出せる。明代江南地域の軍隊が貴州省に入ってから、長い間に漢民族と接触できないため、少数民族に同化され、少数民族の一部の特徴を吸収した。その後、朝廷からの支援が少なくなり、「屯」「堡」が消えてしまい、それに戦争などの外部要素に加え、彼らは移動し始めた。しかし社会的に不安定で、長く同じ地域に定住できず、再移動を繰り返した。その移動と再移動の過程で、「穿青人」「屯堡人」などの各エスニックグループが生じた可能性が考えられる。この仮説は、第二章で検証していきたい。

では彼らのアイデンティティはどのように構築されてきたのか。ここではこしアイデンティティについて説明しておきたい。

1950 年、エリク・H・エリクソンが「自己同一性」という概念を提唱して以来、アイデンティティについて世界中で多くの研究がなされた。人類学はもちろん、心理学、哲学、言語学など様々な分野でその概念が使われている (丸井、2012)。このような諸々の概念の中で、本論文では、『世界民族問題事典』(2005) による「民族アイデンティティ」の概念を使用する。同事典には「民族アイデンティティとは、人が一定の民族的所属、または民族的なもの (言語、宗教、文化、歴史など) と自己との結びつきを意識的、無意識的に取りこんで自己定義を行うとき、成立するといえる。その内容としては、固有の言語や文化への愛着、民族の一員であることの誇り、他からの差別や排斥の経験に基づく連帯感などの様相が指摘される」と宮島喬が定義した。

また、アイデンティティの機能について、ノルウェーの人類学者であるトーマス・ハイランド・エリクセン) は「エスニック・アイデンティティは、過去とのつながりを個人に確信させるエスニックな所属感に普遍で安定した核となる存在があると思わせる」と定義した (エリクセン、2006、p136)。

このように、民族的なものから生まれてきたアイデンティティは、過去との継続を具体化させ、エスニック・グループを安定させる機能をもっている。穿青人の場合、集団を安定させるため、どのようなものをエスニック・シンボルとしたのか。

費による「<sup>チュアンランレン</sup>穿藍人と<sup>9</sup>差をつけたいため、自分たちの服飾の色を強調した」(費、1980、p152) の主張以来、楊も周も「穿青人の服装がアイデンティティの維持に影響した」と同様の論を述べている。しかし、その観点はアイデンティティ構築に影響する要素の可変性を無視しているように思える。

<sup>8</sup> 人々が歴史的過程において、他者との民族間関係や国家の政策、そしてそれらに直面した時の人々のアイデンティティの方向性によっては、漢族の下位集団を形成したり別の非漢民族となったりする (塚田 1998)。

<sup>9</sup> 後に来た漢族を指す、彼らは、藍色の服を着ているため、穿藍人と呼ばれている。

歴史から見れば、穿青人は穿藍人に蔑視されたり、「サル」と蔑称されたりした歴史がある。そうした歴史があったので、彼らは穿藍人と同じに見られたくない。そこで自らの服の色である「青」を強調し、穿藍人と差をつけた。その時期に、外部と対抗するために、「服装」はアイデンティティ構築の核になったとは言える。

しかし、清末民国初に行われた「移風易俗」や中華人民共和国入った政策的な移住により、今服装を保留しているのは、一部の人に過ぎない。現在において、このような限定された地域にしか残っていない服装が本当に穿青人のアイデンティティ構築の核と言ってよいのか。むしろ、現在の穿青人のアイデンティティを維持させているのは、穿青人の生活に密接した「五頭神」という信仰ではないだろうか。楊然(2006)によると、穿青人は、五頭神を尊い存在として、基本的にはすべての穿青人の家で祀られている。穿青人にとっては、家に「五頭壇<sup>10</sup>」があるかないかで穿青人か否かの判断材料となっている。他の民族にはみられないこの風俗は、「穿青人」アイデンティティの形成にとって、重大な役割を果たしたといえるだろう(屯堡人にも五頭神があるが、穿青人のとは違う<sup>11</sup>)。

このように、穿青人アイデンティティ構築の過程において、構築の核になるものは必ずしも固定的なものではなく、時期によっては変化する。筆者は、一部地域にしか残ってない服装ではなく、このような皆が持っている信仰にも注目して研究してきた。それに関する調査結果は、第三章に検討して行きたい。

このように、日本においては、穿青人と同じルーツを持っている「里民」や「屯堡人」に関する研究はあるが、穿青人に関する研究はまだない。一方、中国側での穿青人に関する研究では、そのアイデンティティの維持についての言説はまだ検討の余地があると考えられる。筆者は、先行研究を踏まえ、彼らのアイデンティティの構築過程について再検討して行きたいと考えている。

### 第三節 研究目的及び各章の内容

冒頭にも言及したように、筆者は、「国から単一の民族として認められていない穿青人は、どのように自分のアイデンティティを構築してきたのか」を明らかにすることを研究目的とする。

筆者は、文献調査に基づき、文献調査に基づき、2018年9月及び2019年1月に、貴州省織金県を中心に、県城近くの以那鎮<sup>いなちん</sup>、桂果鎮<sup>けいこちん</sup>を含め、2回のフィールドワークを実施し

た。2018年9月に実施した一回目の調査では、現地住民及び儺劇<sup>だげき</sup>をする道士先生を調査対象にし、「穿青人のアイデンティティの中核」について彼ら自身の考えを聞いた。そして2019年1月に行った二回目の調査では、①服飾の残留状況についての事実確認をする、②「跳菩薩」<sup>ティオプサ</sup><sup>12</sup>に実際に参加して、観察する、③宗族がアイデンティティの維持にどのような影響を与えているのかを確認する、という3つの目的で調査を行った。

この論文は、2回の調査で得られたものを整理し、自分が提出した仮説「現在、『服装』より、信仰である『五頭神』こそが、穿青人アイデンティティを維持しさせる要素である」ということを検証して行く。

<sup>10</sup> 五頭神を祭祀するための祭壇である。

<sup>11</sup> 朱(2011)によれば、屯堡人の五頭神は儒教の影響を受け、英雄として、「廟の神」として祀られている。それに対し、穿青人の場合は、「家の神」であり、家族ごとで祭祀をやっている。

<sup>12</sup> 儺劇の1種、五頭神を祭祀するための仮面劇である。

よって、第一章ではまず、穿青人の概況（人口、風俗、居住地など）を描いていく。それに加え、穿青人のルーツに関する3つの言説を取り上げ、彼らのルーツについて分析していく。最後には穿青人の名称の変遷を切り口に、穿青人のルーツや発展を分析する。

第二章ではまず、歴史における穿青人の民族成分を紹介する。第一章の最後に明らかにした穿青人の発展過程を背景にし、違う時期の国家の政策や当時の人々のアイデンティティの方向性をまとめて、穿青人の民族成分の変化過程を説明する。さらに第二節の「中華人民共和国成立後の穿青人民族成分問題の経緯」では、単に各時期のことを紹介するのみならず、民族優遇政策などにも言及して、総合的に分析する。最後は穿青人内部の認識について、インタビュー結果や先行研究を合わせて紹介していく。

第三章は、穿青人アイデンティティに影響する諸要素、いわゆるアイデンティティシンボルについて紹介する。服や信仰を紹介し、仮説を検証すると同時に、歴史における穿青人アイデンティティに影響する諸要素の重要性についても考察していく。

## 第一章 <sup>チュアンチンレン</sup>穿青人<sup>13</sup>の基本状況

### 第一節 人口分布

1950年代民族登録時、「穿青人」として登録したのは24万8千人前後だったが、第5回人口調査（2000年）の結果によると、貴州省内内において、「穿青人」は約67万人になり、貴州省総人口の1.7%を占めている<sup>14</sup>。そのうち、畢節には約54万人、安順地域には約8万人、六盤水は約2万人で、3つの地域で約95.52%が住んでいる。



図1 貴州省地図

また、県単位で見れば、織金県（23万人）、納雍県（22.5万人）に最も集中している。

図1のように、穿青人は大方、平壩、金沙、貴定、福泉、黃平などの30以上の県に、貴州省東部から西部まで広範囲に居住している。なお、織金県や納雍県は穿青人の村落が多く存在しているが、この2地域を除けば、多くの分布地域では世帯単位でバラバラに居住している。

<sup>13</sup> 青、チン色、黒に近い色。

<sup>14</sup> その後人口調査も実施したが、穿青人のデータが見当たらないため、2000年のデータを使用した。

## 第二節 織金県について

穿青人は30以上の県に分布しているにも関わらず、筆者が織金県をフィールド地にした理由は①第一節でも述べた通り、織金県は23万人以上の穿青人が居住しており、穿青人を主体にする村落も多く存在している。穿青人が散居している地域よりは、織金県で調査する方がより彼らのアイデンティティの構築について分析できると考えたからだ。②納庸県にも穿青人が多く居住しているが、一回目の調査で納庸県と織金県に行って比べた結果、織金県の方がより情報が手に入りやすいと判断した。納庸県にある「勺窩郷」は、「穿青人第一郷」を名乗り、現地の広場に穿青人の風俗が描かれているレリーフ（図2）や穿青人のトーテムである「山魈」<sup>15</sup>の像（図3）が建てられており、勺窩郷政府は観光宣伝もやっているが、実際に聞いてみたところ、穿青人の文化について政府の人は知らない模様だった。



図2 穿青人風俗のレリーフ 勺窩郷、2018年9月、筆者撮影

<sup>15</sup> サルを原型に作られた空想上の生物。

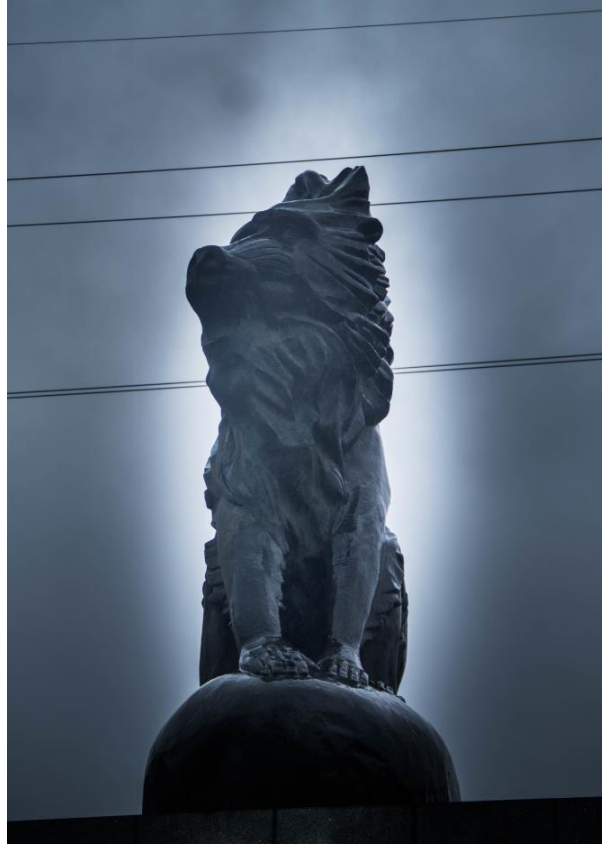


図 3 「山魃」の像 勺窩郷、2018年9月、筆者撮影

織金県では、政府や民間人、そして民族識別工作の経験者と連絡が取れたため、多くの情報が収集できた。以上2つの理由から、筆者は織金県をフィールド地にした。では、織金県はどのような地域なのだろうか。

### 1. 地理状況

貴州省の西部にある織金県は、多様な地形を持ち、海拔も比較的高い。『貴州県情』によれば、織金県の最高点の海拔は2,262メートルで、最低点の海拔も860メートルある。それが原因で、中華人民共和国が成立するまでは外部との交流がとりにくい状態だった。このような環境で、多くのエスニックグループが生まれた。また、戦争や兵役、賦役を逃避するため、外部から移住してきた人もいた。移民たちはこのような閉鎖的な織金県に長期間居住したことにより、周囲の他民族からの影響を受け、自民族の文化と融合し、新たなエスニックグループが形成された。本論文の研究対象である穿青人は、まさにその1つの例とも言える。

なお、気候から見れば、織金県は亜熱帯季節風気候であり、年間平均気温が14.7度で、年間平均降水量は938.4mmである。しかも川が多く、農産物の栽培に適した環境である。地形が複雑なので、多くの穿青人は自給自足で、農業を主たる生業として、家畜を飼ったり、<sup>ぬのぞめ</sup>布染を副業にしてきた。労働力が必要なため、女性も農耕生産に携わり、<sup>てんそく</sup>纏足はしない。そのせいで、穿青人の女性は後に来た漢族に「<sup>ダジャオ</sup>大脚」<sup>16</sup>と呼ばれ、差別された。

<sup>16</sup> 足が大きい。

穿青人の服装は一般的に青色であるが、それは技術力とも関わっている。李発春によれば、技術力不足のため、布染によって綺麗な藍色<sup>あい</sup><sup>17</sup>を作れない。チン色がより作りやすいため、彼らの服装は、チン色であった（それに比べ、後にきた漢族は比較的先進技術を持ち、服の色もあい色であった）。

このように、地理状況は、穿青人の風俗の形成にも大きな影響を与えた。閉鎖的な地域で、自給自足生活をしてきた穿青人には、漢族や周囲の他民族と違う文化が生み出された。

一方、現在織金県における少数民族の分布はどうなっているのだろうか。

## 2. 織金県における穿青人の分布

「畢節市戸籍人口民族族称統計表」（2018）によれば、2018年織金県の総人口は1,234,471人で、公式の民族は46である。そのうち、人口数の上位5民族は漢族（661,556人）、そしてミャオ族（131,362人）、イ族（54,598人）、白族（28,375人）、プイ族（22,711人）で、「未識別」とされている穿青人は308,480人である。多様な民族が集まっている織金県にも、穿青人の人口は漢族の次で、他の民族よりは圧倒的な人数を占めている。中には、漢族より穿青人の人口が多い地域もある。例えば、以那鎮<sup>い な</sup>には総人口45,635人中、穿青人は20,883人で、漢族は20,371人である。

また、「織金県穿青人分布状況」（2004）<sup>18</sup>によれば、穿青人は織金県県内の各地に村落単位で居住している。



図 4 穿青人の家 勺窩郷、2018年9月、筆者撮影

<sup>17</sup> 日本語のあい色。

<sup>18</sup> 添付資料「織金県穿青人分布状況」（2004）に参照。



このように人数が多い集団は、一体どのように形成されてきたのだろうか、彼らのルーツはなんだろうか。

### 第三節 穿青人の由来に関する言説

穿青人のルーツに関する議論は、1950年代から始まったが、今でも結論が出ていない。特に費孝通<sup>ひこうつう</sup>が提出した「漢族の末裔」説は、まず多くの穿青人に反対され、今でも穿青人社会の中に費孝通を批判する声が存在している。まず費孝通の説についてみてみよう。

#### 1. 「漢族の末裔」説

序章でも少し触れたように、費孝通「関于我国民族的識別問題」では「穿青人は明代に貴州に移住してきた漢族の末裔であり、少数民族ではない」と指摘されている(費、1980、p152)。しかし、それは「漢族の末裔」説のはじまりではない。「漢族の末裔」説が初めて出たのは、1955年の第一回民族識別工作の調査報告だった。

1955年、費孝通が調査組のリーダーに任命され、合計50人が4ヶ月をかけて、畢節と安順で穿青人の民族成分を調査した。その結果、「穿青人は漢族であり、少数民族ではない」という結論が出された。『調査報告』には、このようなことが書いてある

「…今回の調査を踏まえ、私たちは、穿青人は元々漢族の一部であり、歴史の中にも漢族との連絡がずっと続いており、1つの単一の民族までには発展していない。彼らが持っている地域的な特徴は部族時代の漢族内部の違いであり、しかもそれらの特徴は既に民族の発展とともに消えた…穿青が漢族を離脱し、新たな民族になるには客観的な要素が不十分である…よって、私たちは穿青人は漢人であり、漢族の一部であり、少数民族ではないと判断した」(全国人民代表民族委員会、1955、p2)。<sup>19</sup>

では、少数民族ではない穿青人は、一体どこからきたのだろうか。

「穿青人の祖先は、明初軍隊と共に、江西<sup>こうせい</sup>からの社会的地位が低い漢人の移民集団である」と指摘されている(全国人民代表民族委員会、1955、p1)。この結論には、時間を「明初」、ルーツを「江西から」、社会地位は「低い」、民族成分は「漢族」と書かれているが、それらの根拠は一体なんだろうか。まずは、「江西から」について見ていこう。

『調査報告』には、調査組が穿青人の言語である「老輩子話」<sup>ラウブエズファ</sup>を調査したことが記されている。「…まず調べなければならないのは、穿青の老輩子話である。もしそれが漢語でなければ、彼らはもちろん漢族ではない。調査の結果、穿青の老輩子話は完全な漢語であり、他の民族の痕跡はない…穿青の老輩子話は貴州の官話<sup>かんわ</sup>から作られたものではなく、そのルーツは早い贛(江西)、鄂(湖北)、湘(湖南)地域の官話である。穿青人は、貴州省でそのような言語を学んだわけではない、きっと学んだ後に貴州省に移動してきた…言語調査から、次のようなことが推測できる。『穿青人の祖先は贛(江西)、鄂(湖北)、湘(湖南)地域で生活してから、その後に貴州に移動してきた』。この推測は、穿青人の伝説や家譜の記録と合致している…」(全国人民代表民族委員会、1955、p5)。しかし、伝説には

<sup>19</sup> 本論文で引用した『調査報告』及び『重新調査報告』は電子資料を使用した。そのため、ページ数は電子資料のページを指す。

本当に信憑性があるのか。調査組はいかなる理由でその伝説を信じたのか。「…私たちの根拠は①穿青の老輩子話には江西省の官話の特徴がある。②穿青人が強調している『<sup>ウシエンシエン</sup>五顯神』は、明初からすでに江西省で流行っていた。③穿青人と江西の繋がりは今でも証拠が残っている。例えば、ある家譜には穿青人が江西に戻った記録がある。④明初の頃には確かに江西から大量の移民が貴州に移動してきたことがある…」(全国人民代表民族委員会、1955、p5)。

続いて、穿青人家譜の記録から、「明初」に移動してきたのがわかる。「…穿青人内部は、<sup>り</sup>李、<sup>ちよう</sup>張、<sup>おう</sup>王、<sup>かく</sup>郭の四姓が多い。彼らの家譜によれば、今の代は貴州省に入ってから20代目である(1955年、筆者注)…このことから計算すれば、彼らの祖先が貴州省に来たのは明初である。穿青人の家譜の記録や<sup>せんえい</sup>先塋の所在地から見れば、穿青人が最も早く着いたのは貴陽や清鎮あたりだった…それらの地域は明代以前にはまだ未開発だった。当時、貴陽の中心は森林であり、イ族の<sup>どし</sup>土司が支配していた。漢族がこれらの地域に定住したのは明初からであり、よって、明代以前穿青人がそれらの地域に居住することは不可能だ…」(全国人民代表民族委員会、1955、p5)。

「…前にも述べたように、穿青人の伝説や家譜に、彼らの祖先は明代<sup>こうぶ</sup>洪武の時、軍隊とともに貴州省に入った…穿青人の祖先は賦役や商人だった。彼らが江西に入った時はどんな地位なのかははっきり判明しないが、伝説によれば彼らは強制的に移住させられた…戦争が終わった後、このひとたちは土地をもらえず…穿青人は当時社会的地位が比較的低い『民』であり、『軍』<sup>20</sup>ではない…」(全国人民代表民族委員会、1955、p6)。

このように、費孝通らは家譜や伝説、そして言語調査に基づき、穿青人は少数民族ではなく、「漢族の末裔」であると結論づけた。しかし、この調査は家譜や伝説の引用が主で、史料をあまり引用していないという問題がある。また、『調査報告』は、穿青人の漢族の属性に着目しすぎる傾向があり、第二章にも述べるが、穿青人は歴史において必ずしもずっと同じ民族成分に定着していたのではない。歴史的には、穿青人は漢族の中央政府と少数民族政権の力関係の程度により、ある時は漢族という自己主張を持ち、また、ある時は自らは少数民族であることを主張した。その過程を経て、穿青人は「漢族にも、少数民族にもなれない」ことになった。しかし、第一回民族識別工作ではこれらのことを考慮せず、単に漢族性が主張された(その識別結果に対する具体的な意見は、第二章に書く)。

次に、「漢族の末裔」説の対極にある「<sup>どじん</sup>土人」説について見てみよう。

## 2. 「土人」説

そもそも、「土人」は、少数民族の汎称なのか、特定されている1つの民族の呼称なのだろうか。

『貴州省穿青人民族成分重新識別報告』(1986、以下『重新識別報告』と表示)には、「…このように、それらの文献には『土人』を各少数民族と並んで記載した。これは、『土

<sup>20</sup> 明代屯田したのは、軍人として派遣された「軍」と、同行して来た民間人の「民」がいる。それによって、地方勢力を鎮圧すると同時に、開発できる。

人』がすでに1つの民族実態の呼称になった証拠である。いわゆる、穿青人の先民を指している…」(貴州省民族識別工作隊、1986、p3)。

このように、「土人」説の土台になる「土人」の定義には、「土人」を1つの民族の呼称として扱っている。では、穿青人の先祖が「土人」であることはどのように証明されたのか。

まずは、『調査報告』(1955)の結論に対し、1982年から1983年、調査組は江西省に行き、調査を行った。その結果、「…穿青人の伝説は事実と違う。まず、江西の民間には貴州省に移住した伝説がない。また、江西の地方誌にもそのような記録が見当たらない。なお、穿青人の家譜は江西省吉安<sup>21</sup>の家譜とは先祖が繋がらない。文化特徴に関しても、穿青人と江西省民衆の文化習俗は異なる。最後に、明初には確かに貴州省に移入した軍民が多かったが、調査したところ、彼らは穿青人と関係がない…」(貴州省民族識別工作隊、1986、p3-4)。これらの調査結果に基づき、調査組は「江西省から移住してきた伝説は信憑性がない」と結論づけた。

また、調査組は文献を引用し、穿青人の先祖は土人であると証明した。清光緒<sup>22</sup>

『平遠州統誌・改修大麦橋碑序』には「…考原橋は康熙初年<sup>23</sup>、土人楊純、張士瀛、王国<sup>24</sup>統が建てた…」とあり、その3人は、穿青人楊、張、王3姓の先祖であると指摘されている。

万曆<sup>24</sup>郭子章『黔記』には「土人…時間とともに華夏の風俗を学んだ…9月には五顯神を祭祀する…」、康熙<sup>25</sup>田雯『黔書』には「土人…男子が商売上手で、婦人は耕作をやる…年明けには山魃を迎え…」と記載してある。これらの記録を根拠にして、調査組は「これらの歴史文献に記録している風俗は、今の穿青人の風俗である。これは、穿青人の先祖は貴州地方誌に記載している『土人』を表している」と述べた(貴州省民族識別工作隊、1986、p2)。その歴史に関しても、「…彼ら(穿青人)が貴州省東部に居住し始めたのは、遅くとも宋代以前である」という、一回目の調査結果とはまったく異なる結論が出された(貴州省民族識別工作隊、1986、p3)。

---

<sup>21</sup> 穿青人の伝説では、先祖は吉安から移住してきたとされている。

<sup>22</sup> 西暦1874年-1908年。

<sup>23</sup> 西暦1662年。

<sup>24</sup> 西暦1572年-1620年。

<sup>25</sup> 西暦1661年-1722年。



図 5 出典 『清・苗族生活図』土人編

このように、「土人」説は、長い歴史を経ても、「土人」はずっと1つの集団として定着していることを前提にしている。それを前提にして、明代や清代の土人に関する記録の中で、穿青人と似ている部分だけを取り上げ、「穿青人は土人である」と分析した。しかし、それは一回目の調査結果と同じく、民族成分はずっと固定的で、変わらないものと認識しているからである。では、そもそも、「土人」は1つの特定の民族とってよいのか。

明代嘉靖<sup>26</sup>『貴州通誌・風俗誌』に、各地の土人が描かれている

鎮遠府邛水司<sup>27</sup>には「土人：…人と喧嘩するのが好き、出入りする時には必ず刀や弩を持っている…二年つき牛を殺して先祖に祭祀する…」

<sup>26</sup> 西暦 1521 年-1566 年。

<sup>27</sup> 現三穗(サンスイ)県。

銅仁府銅仁司<sup>28</sup>には「土人…服飾は漢人と似ている、主に農耕生産をやっている、出かける時には牛に荷物を背負ってもらう…魚を使って祭祀する…喜怒哀楽に忌諱が多い…」

黎平府曹滴洞司<sup>29</sup>には「土人…出かける際には男性が竹籠を背負い、女性が飲み物を持って同行する。葬式のときには地面に卵を投げる、卵が破れなければそれは吉地<sup>30</sup>と判断し、遺体を葬る」

このように、同じ土人と言っても、各地の土人の風俗は必ずしも同じではない。居住地が分散しており、風俗も異なる土人は、本当に同じ集団といえるだろうか。また、明代と清代の文献に出てきた「土人」の概念も、決して同じではない。明代の文献記録の中には、ほぼ彼らは漢族化したか、少数民族の特徴を維持している集団として記録されているが、清代の多くの文献は彼らを「歴代遺民」（各時期の漢族の末裔）と記載している。例えば、田雯『黔書』には「土人は広い範囲で分布しているが、みんなは歴代遺民である」と指摘している。

もし「土人」が特定な民族ではなく、1種の汎称であるとすれば、「土人」説は成立するのだろうか。よって、一見信憑性がありそうな「土人」説だが、よく分析すれば、その前提が間違っていることがわかる。

「漢族の末裔」説や「土人」説のどちらとも正しいといえない中、穿青人の由来は一体どのように分析していけばよいのだろうか。

### 3. 「融合」説

「融合」説は、2006年、楊然<sup>ようぜん</sup>が書いた博士論文「穿青人問題」の中で提出された概念である。「融合」説によれば、現在の穿青人集団は、様々な集団が流動すると同時に、穿青人に加わり、新たに構築された集団である。楊によると、穿青人の内部は、明代からの移民もいれば、当地の「土人」も一部含まれている。いわゆる、流動と再流動の過程で、穿青人は他のエスニックグループを吸収し、今の穿青人になったとしている。

前にも述べたように、土人は穿青人の先祖であるとは断言できないが、一部土人の風俗は穿青人と似ていることは否定できない。ここで年代別に土人に関する記録を見ていこう。

まずは明代では、このような記録が残っている。

「…貴州は元々蛮夷の地域である…土人…すべて黔東夷の所属だ…仁義も知らず、言語不通、風俗それぞれ…」<sup>31</sup>

「土人、新添司に住んでいるものは、土官と衛人と婚姻を結び、徐々に華夏の風俗を身につけた…9月に五頭神を祭祀し…」<sup>32</sup>

清代になると、以下の記録が見られる。

<sup>28</sup> 現銅仁市。

<sup>29</sup> 現榕江(ゆうこう)県。

<sup>30</sup> 風水が良い土地。

<sup>31</sup> 明万暦年間の地方誌『黔記・諸夷』。

<sup>32</sup> 明万暦年間の地方誌『黔記・諸夷』。

「…貴州は鬼方<sup>きほう</sup>と呼ばれ…貴陽の西には…土人…みんなは黔西苗の所属だ…孝悌忠信<sup>こうていちゅうしん</sup>  
33知らず…」<sup>34</sup>

「…土人は、広い範囲に分布している。広順<sup>こうじゆん</sup>、新貴<sup>しんき</sup>、新添に居住している人は、『軍』  
や『民』の人と通婚し、時間が経って礼儀風俗が同じになった…」<sup>35</sup>

「…土人は、広い範囲に分布している。広順<sup>きちゆく</sup>、貴築<sup>きてい</sup>、貴定に居住している人は、漢族と  
ほぼ風俗が同じで…9月に五頭神を祭祀し…」<sup>36</sup>

「…土人は、広順、貴築、貴定に居住している。『軍』や『民』の人と通婚し…風俗は  
中原と一緒…」<sup>37</sup>

「…土人は、昔から広順、貴築、貴定に居住していた、今は既に漢になった…」<sup>38</sup>

以上の史料に出てくる地名の位置を確認してみると、新添司は、現在の貴陽市にある。広順は、現在の長順県にある。貴築は貴陽市で、貴定は現在の貴定市、そして新貴は貴陽にある。これらの地域は、明代入植してきた軍隊が定着した地域である。このように、軍隊の近くに居住している土人は、通婚することにより、漢民族化した。ここから推測できるのは、「穿青人は、漢族と通婚して、漢族と融合した土人の末裔である」。いわゆる、穿青人は単なる漢族の末裔でもなく、土人の末裔でもない。彼らは、土人と漢族とが融合した人たちの末裔であり、遅くとも明代万暦の時にこの集団は現れた。そのため、穿青人には「漢族と少数民族の特徴を同時に持っている」という特徴が見られる。

では、土人から穿青人に至ったのは、一体どのような経緯によるのか。「穿青人」の名の由来から、その過程を見てみよう。

#### 4. 「穿青人」の名の由来

ところで、『調査報告』(1955)には、「識別調査の結果、畢節や安順に居住している里民子<sup>リミンズ</sup>も穿青人である」と結論つけ、ここで「里民子」という呼称が現れた。では、文献の中に「里民子」の風俗についてどのような記録が残っているのか。

清の咸豊時期<sup>かんぽう</sup><sup>39</sup>の地方誌の『安順府誌・地理誌・風俗』には、「…土人、里民子とも呼ばれ…チン色の服を着る、婦女は纏足しない…冠婚葬祭は漢人と同じ…」。清の道光の地方誌である『安平県誌』には「…土人は多くのところに居住している…1つは里民子と呼ばれ、チン色の服を着る…9月には五頭神を祭祀する…今は漢人と通婚…」。これらの文献に掲載されている里民子の風俗は、確かに今の穿青人と似ている。『重新識別報告』でも、これらの文献を証拠に「里民子は穿青人の先祖である」と結論づけている。その結論は、また前述の土人説と同じ、里民子という汎称を単一の民族に特定している。各時期の

<sup>33</sup> 誠意を込めて親や目上の人に仕えること。「孝悌」は両親や目上の人にしっかりと仕えること。「忠信」は誠意をもって、決して欺かないこと。儒教の四つの徳目（四字熟語辞典オンライン <https://yo.ji.jitenon.jp/yojih/3608.html> 最終アクセス 2019年11月18日）。

<sup>34</sup> 清順治年間(西暦1643年-1661年)の地方誌『貴州通治』。

<sup>35</sup> 清康熙年間の地方誌『黔書』。

<sup>36</sup> 清乾隆年間(西暦1735年-1795年)の地方誌『貴州通志』。

<sup>37</sup> 清道光年間(西暦1821年-1850年)の地方誌『一統誌・貴州統部・苗蛮』。

<sup>38</sup> 清道光年間の地方誌『貴陽府誌』。

<sup>39</sup> 西暦1850年-1861年。

『百苗図』と比較してみれば、「里民子は特定の1つの集団ではなく、漢族側からの汎称である」ことがわかる。

まずは服の色について、『進貢苗蛮図』(図6、陳枚、清)や『苗蛮図冊頁 41幅』に描かれている里民子は、女性が深い色の服を着ている、男性は比較的に浅い色の服を着ている。それに対し、『苗蛮図説』(陳浩、清)や『黔省諸苗全図』(図7)『苗蛮図説(82幅)』では比較的に鮮やかな色を着た女性が描かれている。また、生業として『進貢苗蛮図』は農耕の様子を書いてあるが、その他の文献には羊を飼っているシーンを描いている。このように、同じく里民子と呼ばれていても、彼らの服飾や、生活方式は一様ではない。



図6 出典『清・進貢苗蛮図』 里民子編



図 7 出典『清・黔省諸苗全図』里民子編

彼らに共通しているのは、その服の様式である。彼らが着ている服は、少数民族の様式ではなく、清代の満族の服とも異なり、むしろ明代の漢族の服装様式に近い。このことから、「里民子は、漢族的色彩が濃厚な人たちである」と推測できるが、彼らは一体どのように形成されたのか。

『百苗図抄本匯編』には、「…この 16 の集団は、過去の文献に記録がない、彼らの呼称は陳浩がつけた…里民子…」と記載されているが（楊、2004、p468）、実際には、嘉慶以前の乾隆時期、すでに里民子の記録があった。『黔南識略』には「水城 序、苗は…里民子など、種類が多い…漢語がわかる、農耕や織布ができる…」と記載してある。彼らの分布地域については

「…里民子、貴陽、黔西、大定、清鎮に分布している…」<sup>40</sup>

「…畢節県の苗民は…里民子などがいる…」<sup>41</sup>

「…里民子は…大定境内にある…」<sup>42</sup>

「…里民子は、大定、黔西、貴陽、貴築、安順、清鎮などの地域に分布している…」<sup>43</sup>

「…里民子は、大定、興義、安順などの地域に…」<sup>44</sup>

このように、彼らは比較的広い範囲に分布しているが、多くは貴陽、黔西、大定、清鎮

<sup>40</sup> 嘉慶李宗昉『黔記』。

<sup>41</sup> 道光羅饒典『黔南職方紀略』。

<sup>42</sup> 道光年間の地方誌『大定府誌』。

<sup>43</sup> 『苗蛮図冊頁 41 幅』。

<sup>44</sup> 『苗蛮図説 82 図』。



の4つの地域に居住しているのがわかる(現在の穿青人の分布地域とほぼ一致している)。では清代から記載され始めた里民子は、なぜそれらの地域に居住していたのか、そして、清になって彼らが現れた理由とはなんだろうか。それは、「改土帰流」<sup>かいどきりゅう</sup><sup>45</sup>によって、元々水西土司の統治した地域が清政府の統治に変更されたことと関わる。



図 8 明代貴州省地図 (一部) 出典 譚其驥編『中国歴史地図集』

<sup>45</sup> 改土帰流は、「土司」(少数民族出身の首長)を「流官」(中央政府が派遣する官僚)に変更することにより、辺地を中央政府の統治下に組み入れる政策である。



図 9 清代貴州省地図（一部） 出典 譚其驤編『中国歴史地図集』

『重新調査報告』によれば、最初軍隊が入植し、開発した土地は、優先的に『軍』の人に提供された。良い畑や良い土地はすべて屯軍が所有していたため、一部の「土人」は貴陽から水西土司領地近くの水外六目地（清鎮、平壩西部、鴨池河東岸）地域に移動した。

その後、明末になり、水西土司安邦彦の反明運動の失敗を契機に、水外六目地が中央政府の統治になり、軍隊が入植した。そのため、「土人」はさらに西の土司の統治地域に移住した。康熙時期、呉三桂が水西土司に勝ったことを機に、土司制度が廃止された。楊庭碩らは、「土司が廃除されたあと、元々漢語が話せる彼らは里甲に編入された。しかし、元々彝族土司に支配された経歴があったため、他の人からは少数民族と見られていた」と指摘した（楊、2004、p463）。

このように、「非漢非蛮」で「土人」は、清になってから「里民子」とも呼ばれるようになった<sup>46</sup>。その時の「里民子」は、依然として「非漢非蛮」の特徴を持っているが、集団内部は必ずしもみんなチン色の服を着ていたわけではない。では一体どんな理由で、彼らが穿青人になったのか。

まずは、穿青人の伝説から彼らがチン色を着る理由を見てみよう。  
 江西からの移住伝説によると、以前江西に住んでいたとき、災害予防のため、悪い龍にチン色の服を着た稚児を人身御供に差し出した。ある道士が龍を消滅し、その後着任した地方官僚はその話が面白いと思ったので、民衆にもう一度チン色の服を着た稚児の姿を見せてもらった。その役人が「君達は穿青と名乗りなさい」と言ったので、「穿青人」と名乗るようになったというものだ。

<sup>46</sup> ここで注意するのは、清になってから土人という呼称がなくなっておらず、里民子と土人の2つの呼称は同時に存在した。

また、水西地域では呉三桂に関わる伝説がある。清の朝廷から派遣されてきた呉三桂から殺されないように、穿青人の祖先たちは自らをミャオ族ではないと主張し、呉三桂と約束を交わした。呉三桂は、家の扉の近くにチン色の旗を立てれば、殺さないと人々に約束した。しかし、旗は真似されやすいので、チン色の服装になったと言われている。

そのほか、「少数民族と区別するため」という考えもある。貴州省には「穿青穿藍真漢族、穿紅穿緑野狗精」<sup>47</sup>ということわざがある。穿青人は漢族の身分を維持するため、チン色の服装を着ているとされている。

しかし、これらの言説はあまり信憑性がない。チン色を着ることについて、筆者は、技術力が足りないからだと考える。前にも言及したように、穿青人は、土人と漢族が融合した人たちの末裔である。『調査報告』(1955)によれば、この時期貴州省に移住してきた江西省の漢族は、先進的な技術を持つ漢人というより、漢族の1つの下位集団(部族)である。彼らは、そこまで技術力を持たず、アオ色を染められなかったと推測できる。そのため、彼らは比較的染めやすいチン色の服を着るようになった。

同じ時期、他の漢族の影響を受けたエスニックグループのなかにも、チン色の服を着る集団がいた。咸豊『安順府誌・地理誌・風俗』の記載によれば、「青苗…婦人はチン色の布で服をつくる…」<sup>ドンミャオ</sup>「洞苗、男女ともチン色の服を着ている…」<sup>カクろう</sup>「革老、男性はチン色の服を着る、女性は長い袖の服とスカートを着る…」とある。



図 10 出典 陳浩『蛮苗図説・青苗編』

このように、その時代チン色を着ているのは「里民子」だけではなかった。さて、チン色の服をシンボルにする穿青人は、どのようなタイミングで出現したのか、彼らがチン色の服をシンボルにしたのはなぜなのか。

<sup>47</sup> チン色及びあい色の服装を着ているのは本当の漢族、鮮やかな服装を着ているのは少数民族という意味。

「穿青」が初めて文献に出てくるのは、光緒『平遠州誌』である。「…同治元年<sup>48</sup>、穿青民龍杠<sup>49</sup>が反乱を起こした…」、その後、民国『鎮寧県誌・民族』には「穿青、青色布を好み、以前は漢族と違っていたが、今は漢族と同じ。ただ婦人は纏足しない…この集団は、鳳頭籍（または鳳頭鶏）と違う」と記載されている。ただ、それらの記載は、あくまでも他称であり、しかも一種の蔑称である。他称、しかも蔑視されていた「穿青」は、どのような理由で自称することになったのか、それが自称するようになったのはいつ頃だろうか。自称になった時期に関する記録はないが、彼ら自身が「穿青」と名乗る理由については、『調査報告』にこのように書いてある。「歴史の中で、穿青人はあとから来た漢族との間で色々な不愉快なことがあったため、その人たちと差をつけるために自分たちの服の色を強調した」（全国人民代表民族委員会、1955、p16、『重新調査報告』には、「穿青」は他称であったことに言及していない）。その説が成立すると仮定すれば、「穿青」が自称になったのは、彼らと後に来た「穿藍人」との間で矛盾や対立が生じた時ではないだろうか。

『調査報告』によると、水西地域が清の支配になった後、穿藍人は官僚として派遣され、あるいは商売をしに水西地域に来て、定着した。経済的には比較的裕福で、権力を持っている穿藍人は、城内に居住していた。彼らは、城外（田舎）に居住している穿青人を軽視したが、その時期はまだ衝突が激しくなっていなかった。土司の経済的支配に反抗するために、一時的には穿青人と穿藍人が協力したときもあったが、清末民国初の時、外部から大量の商品が流入し、それ故に自給自足の経済体系が維持できなくなった。外部と連絡を取っていた穿藍人は、その地域の商業圏を支配し、利潤を得るようになった。それに対し、穿青人は商売がうまくできず、両者間の経済的な格差が大きくなった。穿青人と穿藍人との間の矛盾が激しくなったのも、この時期である。（具体的には第三章第一節に説明）。

ここで穿青人の名の由来をまとめよう。元々土人と呼ばれた彼らは、移住や清朝の統治地域の変更により、一部が「里甲」に編入され、里民子とも呼ばれた。光緒時期から穿青とも呼ばれたが、それは他称であり、自称ではない。自称になったのは、穿藍人と差をつけたい時、いわゆる衝突が激しくなった清末だと推測される。

では、一体穿青人の形成過程はどうなっているのだろうか。ルーツや名の由来から見れば、穿青人は移住と共に形成した集団であると推断できる。彼らは、元々土人と漢族が融合した集団であり、戦争と賦役の影響で、一部の「土人」は最初の居住地（貴陽近く）から離れ、中央政府と少数民族政権の中間の地域に移住し、一部はさらに漢族と離れ、イ族が統治する水西地域に移動した。その後、明末になり、安邦彦の反乱により、元中間地域に居住した人は、水西地域に移動した。水西が清王朝の統治下になった後、彼らは「里民子」として史料の中に記載されるようになった。この過程で、「里民子」（または「土人」集団）は他の民族の影響を受けたり、他の集団の文化を吸収することもあった<sup>50</sup>。また、移住先の違いにより、母集団である「里民子」の下にも下位集団が形成されたが、穿青人は、その下位集団の1つであると言えるだろう。

では、漢族の特徴もあり、少数民族の特徴も持っているこの集団は、歴史的にはどんな民族として扱われてきたのかについて、次章でみていく。

<sup>48</sup> 西暦 1862 年。

<sup>49</sup> 龍杠は、当時民間武装集団への呼称である。

<sup>50</sup> 『調査報告』と『重新調査報告』では、「イ族土司から強制的に文化を変更されなかったため、穿青人の風俗はほぼ変化せずに、以前持っている風俗が代々伝承できた」と指摘しているが、穿青人の風俗には明らかに漢族と他の少数民族の特徴が見られる。そのため、「移住の過程、そして移住先で他の民族の文化を吸収した」と筆者は考えた。

## 第二章 <sup>チュアンチンレン</sup>穿青人<sup>51</sup>の民族成分

### 第一節 穿青人の民族成分のふれ

#### 1. 穿青人「非漢非蛮」の特性

前述の通り、穿青人は漢族と通婚して、漢族と融合した土人の末裔である。そのため、穿青人集団は生まれた時から「漢族」と「非漢族」の二重の特性を持っている<sup>52</sup>。その後、戦争や賦役から逃げるため、彼らは漢族の居住地から離れ、漢族と非漢族の中間地域に移住した。楊ら（2004）が指摘したように、<sup>リミンズ</sup>里民子（穿青人の前身）は、漢語とイ語の両方とも話せるため、漢族とイ族の間で商売を営んでいた。その過程で、複数の文化と接触した穿青人は、他のエスニックグループの文化を吸収し、彼らの「二重性」がさらに強化された。

周囲の他民族からの呼称からもその特徴を窺うことができる。『調査報告』（1955）によれば、穿青人は周囲の人からは「貧漢人」<sup>53</sup>、「大脚漢人」<sup>54</sup>、「<sup>チュアンダシューズ</sup>穿大袖子的漢人」<sup>55</sup>、「<sup>ダンリミン</sup>当里民的漢人」<sup>56</sup>のように、「漢人」の前に形容詞をつけてから呼ばれていたという。そして『重新調査報告』（1986）には、穿青人は<sup>チイアアオ</sup>プイ族から「<sup>サアローウミイ</sup>戛敖」、<sup>サア</sup>イ族から「<sup>チイア</sup>撒婁米」、<sup>サアグウーロウ</sup>ミャオ族から「<sup>サア</sup>撒格婁」と呼ばれていたと指摘されている。「<sup>サア</sup>撒」「<sup>チイア</sup>戛」は「客」「後に来た人」「別人」を意味している。その2回の調査結果を合わせて見れば、穿青人は「非漢族の後に移住して来た、漢族の特徴を持つと同時に、漢族と異なる特徴も持っている集団である」と判断できる。いわゆる、周囲の非漢族から見れば、穿青人は漢族の特徴を持ちながら、非漢族的の特徴もある集団である。

その二重性は、穿青人が持っている風俗の中にも存在する。ここでは穿青人祭式の一部を例とする。穿青人の祭礼の流れは①まず司会者が流れを解説する、②その後、死者の子供が男女別に分かれ、男性が左、女性が右で跪く、詩を歌う人が「<sup>しきょう</sup>詩経」の「<sup>りくが</sup>蓼莪」篇<sup>57</sup>の第一部分を歌う、③司会者が祭文を朗読して、子供たちは泣きながら祭文を燃やす。この時は「<sup>はっか</sup>詩経」の「<sup>はっか</sup>白華」<sup>58</sup>篇の第一部分を歌う、④娘（たち）は食物を持ち跪き、叩頭する。この時は「蓼莪」第二部分を演奏する、⑤息子（たち）が「<sup>らいき きょく</sup>礼記・曲礼」の子供に関する部分<sup>59</sup>を朗読する。この時は「白華」篇の第二部分を演奏する、⑥娘（たち）は酒を持ち跪き、叩頭する。この時は「蓼莪」第三部分を演奏する、⑦息子（たち）が跪く、

<sup>51</sup> 中国語の「青」とは青色というよりは黒に近い色。

<sup>52</sup> この特徴を本論文では「二重性」と呼び、使用する。その後に出てきた「二重性」の用語は、「少数民族性」と「漢族性」を同時に持っていることを意味する。

<sup>53</sup> 金がない漢族。

<sup>54</sup> 足がデカイ漢族。

<sup>55</sup> 袖口が大きい服を着ている漢族。

<sup>56</sup> 里民になった漢族。

<sup>57</sup> 亡くなった両親に対する自分の無力感や悲しさを表す篇。

<sup>58</sup> 元々は、離婚された女性が元旦那への思念を表す篇であるが、ここでは亡くなった人に対する思念を表示する。

<sup>59</sup> 「凡為人子之礼、冬暖而夏清…則掩口而对」部分。

叩頭する。この時は「白華」篇の第三部分を演奏する、⑧子供全員が三回叩頭してから外に出て、冥錢を燃やし、三回お辞儀をする、⑨息子（たち）が跪き、点主大賓<sup>デンジュウダイヒン</sup><sup>60</sup>を迎える。

この時は「詩経」の「鹿鳴」<sup>ろくめい</sup>篇の第一部分を演奏する、⑩息子（たち）は靈牌に向かって三回叩頭してから、靈牌を持ち大賓の前に跪く、⑪大賓が神を靈牌に迎え、息子（たち）が跪いて大賓に感謝し、三回叩頭する、⑫詩を歌う人に感謝、三回叩頭する、⑬再び大賓に感謝、三回叩頭する、⑭爆竹を鳴らして、祭礼終了。このように、穿青人の祭礼の中には濃厚な漢族の影響が見られる。

漢族の影響が見られるとともに、他の民族の影響も見られる。楊（2006）が指摘したように、「死んだ老人の前歯を折るのはコーラオ族の風俗である」「死者が分骨された後、子たちは三夜連続火を燃やすのは、<sup>ていきょう</sup>氏羌の影響である」。

では、このような二重性を持って生まれ、そして発展の同時に二重性がさらに強化され、漢族でもなく他の非漢族とも違う風俗を持っている穿青人は、自らの民族成分についてどのような認識を持っているのか、その自己認識に影響する要素はなんであろうか。次に、穿青人が「漢族」であった時期や穿青人が「非漢族」であった時期の動きから、彼らが民族成分を選択する過程においてどのような要素が影響したのかを検証する。

## 2. 『調査報告』にみる穿青人の漢族性

『調査報告』には、穿青人が漢族軍隊側に立ち、非漢族反乱を鎮圧する記載がある。「…天啓元年<sup>てんけい</sup><sup>61</sup>、安曾（<sup>あんほうげん</sup>安邦彦）が反乱した…（穿青人は）4万9千人の兵士を徴発し、貴州（貴陽）に行き、（明軍隊）を支援した」<sup>62</sup>とある。土司と漢族の間で生計を立てていた穿青人が漢族軍隊を支援したのは、イ族反乱者からの暴行を避けたかった他に、漢族の庇護の下で利益が得られることも重要な原因であると考えられる。

土地を持っていない穿青人は、生計の為にイ族土司の<sup>こさくのう</sup>小作農になるしかなかった。漢族の「<sup>ぐんとん</sup>軍屯」との連携ができた結果、土司の支配から離脱できたことに加え、軍隊の力を借り、他の非漢族の土地を奪うこともできた。『調査報告』には、李氏家譜に記載しているミャオ族の土地を奪った部分として、「…永楽17年、<sup>さんさい</sup>三寨の<sup>こじょう</sup>虎場の苗族は、政府からの命令に反対したため、政府から<sup>そうめつ</sup>剿滅の命令が出された。（穿青人は）ガイドとして選ばれ…三寨の苗族を全員剿滅した…功労賞として、その土地が恩賜された…」が引用されている（全国人民代表民族委員会、1955、p9）。このように、穿青人は漢族の居住地から離脱したとしても、漢族との繋がりが保留された。

第一章に書いたように、土司の経済的支配に抵抗するために、穿青人と<sup>チュアンランレン</sup>穿藍人が協力

<sup>60</sup> 神を迎える人、ほぼ当地の名望が高い人が務める。

<sup>61</sup> 1621年。

<sup>62</sup> 筆者訳。括弧内は筆者による注釈。

した時期もあった。『調査報告』では、例として納雍大兔場<sup>のうようだいとじょう</sup>の成立があげられている。大兔場は、元々安姓土司に支配された街場<sup>かいじょう</sup><sup>63</sup>であったが、そこでの税金が高かった上に、商品は土司に勝手に取られるリスクがあった。そのような状況を打破するために、穿青人と穿藍人<sup>じぬし</sup>の地主が手を組んで、税金がない新しい街場を開設した。そして土司の武力的脅威に抵抗するために自らの武装隊を作った。その結果、土司の街場が寂れて、その代わりに新しい街場は繁盛した。

このように、『調査報告』には、穿青人が漢族として活躍した歴史があったことが摘されている。それに対し、『重新調査報告』はどのような記載があるのかを次でみてみよう。

### 3. 『重新調査報告』にみる穿青人の非漢族性

『調査報告』には、安邦彦反乱の時、穿青人が漢族を支援した歴史を記載しているが、『重新調査報告』では正反対のことが記載されている。『重新調査報告』によれば、当時穿青人のリーダーである張良珠<sup>ちやうりやうしゆ</sup>は安邦彦のために策謀をめぐらした。そのため、安の反乱が鎮圧された後、穿青人は中央政府から逆賊として扱われ、居住地から離れ、水西に移住した。

康熙年間、呉三桂<sup>ごさんけい すいせい</sup>が水西を鎮圧した際にも、穿青人は非漢族と見られ、軍隊からの暴行を受けた。「水西伝」には「…軍隊に対抗するために…穿青と仲家<sup>ジュンチヤ</sup>は哨戒を務めた…（軍隊は）穿青（人）の家を何軒も燃やした…」の記載がある、穿青人と他の非漢族と一緒に漢族軍隊に対抗したが、結局失敗した歴史が記録されている。

また、同治元年<sup>とうち</sup><sup>64</sup>、穿青人による反乱について、光緒『平遠州統誌』には「…同治元年、穿青人及び龍杠<sup>りゅうこく</sup><sup>65</sup>が反乱した…多くの漢族の民衆は兵禍を受けた…」と記載している。反乱の理由については、『調査報告』と『重新調査報告』に同じく、「太平天国<sup>たいへいてんこく</sup>の影響を受けた農民が、地主に反抗するために発生した」と指摘されている。

以上のように、穿青人は自らの利益を保障するため、他の非漢族と一緒に漢族と戦ったり、漢族軍隊の殺害を受けてから非漢族とともに漢族に抵抗した時期がある。

漢族と非漢族の二重の属性を持っている穿青人内部でも、生活環境の違いによりエスニシティの違いが出てくる。同じ時期であっても、内部各集団が求めている利益が違っていると、内部が分化し、異なる民族成分を選択するようになったこともあるだろう。安邦彦反乱時期の穿青人内部の異なる動きには、まさにその特徴が表されている。居住地の漢族官府の勢力が強ければ、漢族に近寄り、居住地で非漢族の勢力が強ければ、非漢族に入り、漢族と対抗する傾向が見られる。そのような歴史があったから、最終的に穿青人は漢族、非漢族の両者と同一民族として扱われず、「非漢非蛮」の中間集団になった。

<sup>63</sup> 定期的にかかれる市場。

<sup>64</sup> 西暦 1862 年。

<sup>65</sup> 龍杠は、当時民間武装集団への呼称である。

このような複雑な歴史を持っている穿青人は、中華人民共和国政府にはどう扱われているのだろうか。

## 第二節 中華人民共和国成立後の穿青人民族成分問題の経緯

### 1. 二回の民族識別工作

序章にも言及したように、穿青人の民族成分判定のため、中央政府は2回の民族調査を行った。一回目の調査は、1950年代費孝通がリーダーを務めた調査組により実施された。調査は、穿青人の言語、信仰などの風俗を漢族と比較した。調査結果は、「穿青人は漢族である」と判断した。

しかしその結果は穿青人知識人の猛烈な反発を招いた。反発の理由は、主に以下の3つである。①調査対象が一面的であった。1950年代の調査は、大定<sup>66</sup>を中心に行ったが、大定は清時代以降中央政府の統治を受けたため、当地の穿青人の漢化程度は他の地域より高く、穿青人を代表できない<sup>67</sup>。②史料選択が不十分である。穿青人知識人は、1950年代の調査は史料より家譜の記載を重視にしている傾向があると主張した。そもそも家譜は十分な信憑性を持っているのかについて疑問である。③そもそも明清の時期、貴州省に移住したのは江西省の人に限らない。多種多様なルーツを持っている移民集団の中、「穿青人」という江西省からの移民集団だけが移住元の地域的な特徴を持っているのは、論理的でない。

これらの反対意見があった結果、貴州省は1981年から二回目の民族識別工作を実施した。二回目の民族識別工作について、当時貴州省省委<sup>68</sup>副書記を務めた苗春亭<sup>69</sup>は「自己識別」の方針を提案した。苗は「…私は、できれば自民族の幹部や知識人を中心に調査組を組んだ方がいいと思う…彼らは積極的にこのこと（民族識別）をやってくれるはず…彼らの中には研究力を持つ人もいる、そういう人たちは当地でも名望が高い…科学的な根拠があれば、自らも結論が出せる」という意見を出した<sup>69</sup>。

---

<sup>66</sup> 現在の大方県。

<sup>67</sup> 例えば、大定には「老輩子話」を話せるひとがいなかったが、田舎の地域にはまだ「老輩子話」を話せる人がいた。

<sup>68</sup> 省委とは共産党省委委員会の略。

<sup>69</sup> 「苗春亭同志在全省民族識別工作座談会的談話」（1981）。



来？我有一个想法，我希望力争做到以本民族的干部和知识分子为主体来组织力量。如侂宪的识别，廖朝隆等二十多人写了一篇民族识别工作报告，对我很有启发。就是说未定民族他们自己迫切要求作好这件事，他们有积极性，而且我考虑到现在与五十年代比较，有了很大的发展。人数增加了，水平提高了，他们对马列主义、毛泽东思想的认识水平有了提高，政策水平和知识水平也提高了，他们当中还有很有研究能力的人，这些人在本民族中也有相当的威望，他们对于本民族关心的这件事有民族感情，有很大的积极性。侂宪的调查报告签名的有二十多人，那个电视大学的小罗也签了名，人才不少。这二十多位大都在省级机关工作，而且侂宪人数只有三万多，识别工作不难进行。兴义问我要人，我就提出可以把识别喇叭人任务交给靖隆，他们第一书记就是喇叭人，让他们自己识别自己可以不可以？这是打个比方。现在已经有条件了，我加了“主要”两个字，当然汉族和其他民族也可以参加。又加了“力争”两个字，尽可能把本民族的人组织起来，这样就可以干了。我想这不要很多的人，甚至三五个人也是可以的。现在省识别队才十一个人，甚至还可以少一点，本民族的干部知识分子有这方面的知识，又有民族政策的水平，因此我的信心就来了，一齐动手就快了。陈永康同志他们组织十多个人对木佬人进行识别，只半年就大体完成了百分之八十的工作量。喇叭人的识别据说也完成了百分之七十的工作。我的信心就产生在这一点上。我相信大家是可以完成这一任务的。民族语言方面，专业性较强，据说这方面有困难，可另外开小会再研究一下，或者可以开训练班来解决。还有什么困难也可以提出来研究。

图 11 出典「苗春亭同志在全省民族识别工作座谈会的谈话」一部

その意見に従い、二回目の民族識別工作の主体は、その民族出身の幹部や知識人であった。ところで、調査組内部は必ずしも意見が一致していたわけではない。当時調査組の一人であった李発春<sup>りはつしゅん</sup>は、1982年2月、史料調査係として江西省に派遣されたが、結局彼は「穿青人の先祖は洪武年間軍隊と一緒に貴州省に移住してきたのではなく、元末戦争で負

けた陳友諒<sup>ちんゆうりょう</sup>の敗軍が、湖南省<sup>こなんしゅう</sup>を経由した後、貴州省に入った人々である」と考えた。李は

「敗兵たちは、当時人が少なく、政府の統治力が弱い西の方に逃げようと思って、西に移動し始めた。途中で、追手が来なかったら、一時定居し、また追われたら西に移動し続ける」と述べた。しかしその意見は当時調査組内部主流の意見（穿青人は貴州省の原住民である）と一致しなかったため、彼は調査組から外され、1982年10月からまた新しい人が江西省に調査しに行った。

結局、第一章に示したように、調査組は「江西省から移住してきたという伝説は信憑性がない」と結論づけ、「穿青人は貴州省の原住民である」と指摘した。1985年、貴州省民族事務委員会が国家民族事務委員会に調査報告を提出したが、「穿青人と漢族の違うところより似ている部分が多い」と回答され、報告は採用されなかった。1986年5月、

国家民族事務委員会党組<sup>とうくみ</sup>の報告には「…我が国の民族識別の任務は、50年代においてはほぼ完了した。民族成分を訂正する件も、基本的に解決できた…似ている民族集団に対しては…できれば一体にさせ、同じ民族に分類する」という方針を提出した、それにより穿青人が単一民族として承認されるのはほぼ不可能になり、二回目の調査報告も資料として保存されるに留まった。

このような背景において、中国公安部が管理している、身分証の民族成分はどのように記載されたのであろうか。

## 2. 2005年の公安部<sup>70</sup>による「指示」

元々、1986年2月「公安部、国家民族事務委員会關於居民身分証使用民族文字和民族成分<sup>でんしや</sup>填寫問題的<sup>てんしや</sup>通知」（填寫とは記入の意）には、「…既に漢族として認定された集団は、本人に意見があっても、『漢族』と記入すべきだ…」と指示を出したが、貴州省内部ではその指示が不適切であると判断し、実施しなかった。4月、「中共貴州省常委弁公紀要」（1986）29号が出され、「…明確な解決方法が出てなければ、現状を維持する…民族成分は従来そのまま記入する」という指示が出された。

2003年5月、穿青人の民族成分の記入について、公安部は「漢族で記入してください」とする意見を改めて提出したが、穿青人集団の強い反対を招いた。穿青人の代表は、織

金<sup>きんけん</sup>民族事務委員会を経由し、貴州省民族事務委員会に反対意見を提出した。その結果、

2003年8月、「公安部關於對貴州省<sup>ガカレン</sup>革家人<sup>71</sup>和穿青人居民身分証民族項目内容填寫問題的批復」（図12）が出され、「…民族団結や社会の安定を維持するため、貴州省の革家人や穿青人に対しては…民族成分は以前と同じように記入してください…民族項目の記入に対する不満があれば、早めに報告してください…1986年2月の通知と本通知が不一致なところは、本通知を基準に修正してください…」と返答した。

<sup>70</sup> 公安部は、中国国内治安を保つ行政単位である。

<sup>71</sup> 中国では、イ革家人と書きます。その漢字が見当たらないため、代わりに「革家人」を使う。

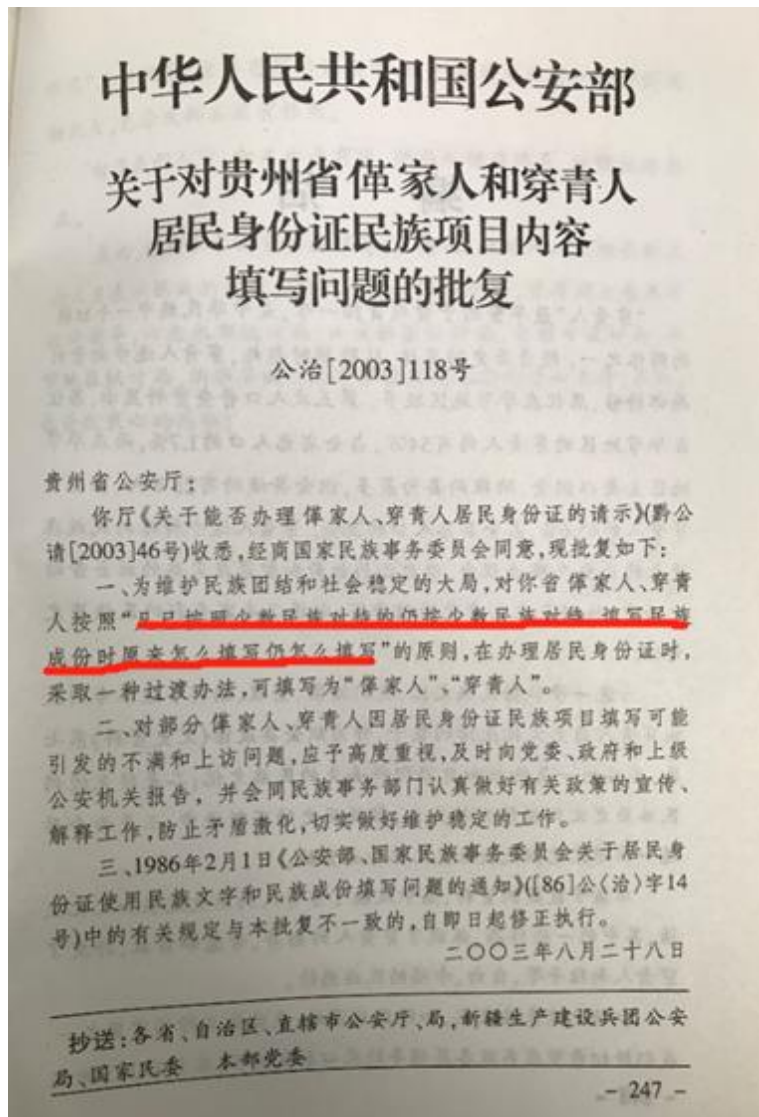


図 12 「公安部關於對貴州省革家人和穿青人居民身分證民族項目內容填寫問題的批復」  
下線が引いているところには「貴州省の革家人や穿青人に対しては…民族成分は以前と同じく記入してください」と書いてある

しかし、身分証に「穿青人」と登録できるのは、貴州省省内だけに過ぎない。他の地域の公安部の戸籍管理システムには、穿青人のコードがない。そのため、貴州省以外の地域で身分証の発行を申請する場合は、穿青人ではなく、漢族として記入されるケースが多い。他の地域で穿青人を身分証に記入したい場合、貴州省公安部に民族コードを申請する必要がある<sup>72</sup>。

このように、いくつかの指示を経て、最後には「穿青人」という民族成分はローカルには承認されたが、他の公式に認定された少数民族のように、全国的には一個の民族として承認は得られていない。むしろ「穿青人」という民族成分は、貴州省省内だけに限られた、中央政府との妥協の産物とも言える。

このような「穿青人」集団という「不安定要素」を消すために、2014年に貴州省民族宗教局がある通知を出した。

<sup>72</sup> 唐紅麗「穿青人写進身分証 需向貴州省申請民族代碼」中国社会科学網 2014年5月12日  
[http://www.cssn.cn/zx/bwyc/201405/t20140512\\_1155580.shtml](http://www.cssn.cn/zx/bwyc/201405/t20140512_1155580.shtml) 最終アクセス 2019年11月17日。

### 3. 穿青人に対する政策の動き—2014 年以降—

2014 年の「貴州省民族事務委員会關於開展未定族称人們共同体的族称認同基礎工作的通知」には、未識別民族問題の解決についていくつかの原則が提出されている。それらの中でも特に注目すべきなのは、「…その問題が未解決である以上、現状のままを維持すべきだ…」と指摘したが、その次には「…自発的に他民族に変えたいのであれば、『就近認同』<sup>73</sup>の方針に従い、居住地近くにいる民族に変更することは許可する。出身地から離れた人が民族成分を変えたい場合は、出身地の状況を基準に変更してください。このような原則に同意すれば、民族成分の変更ができる…」という、一定条件を満たせば、穿青人が他の民族に変更することもできる案が出されたことだ。

その後 2015 年 6 月に出された「中国公民民族成分登記管理辦法」の第十九条には「未定族称公民の民族成分は、国の規定に従い管理してください」のような曖昧な表現がみられるが、2015 年 9 月に出された「貴州省公民民族成分登記管理實施方法」の第二十二條には「未定族称公民の民族成分は、国や本省の規定に従い管理する。人民政府民族事務部門は『自発的』『就近認同』の方針に従い、未定族称公民の民族成分工作を行うべきだ…」と明確な表現のもと、公式的に穿青人の民族変更が許可された。

---

<sup>73</sup> 居住地近くの民族であれば、その民族に変更することが可能である。しかし、居住地が遠くない民族に変更することは認められない。

贵州省公民变更民族成份证明书存根(样式)

根据《贵州省公民民族成份登记管理实施办法》，XXX（性别：，  
身份号码：）申请变更民族成份为 族，符合变更条件，  
已经审核批准，审批编号为：，请在签字领取证明书后 30 日  
内到户籍所在地公安派出所办理民族成份变更登记。

审批部门公章

县级民族工作部门(单位公章)

年 月 日

贵州省公民变更民族成份证明书(样式)

根据《贵州省公民民族成份登记管理实施办法》XXX（性别：，  
身份号码：）申请变更民族成份为 族，符合变更条件，已经  
审核批准，审批编号为：，请在签字领取证明书后 30 日内到  
户籍所在地公安派出所办理民族成份变更登记。

审批部门公章

县级民族工作部门(单位公章)

年 月 日

图 13 民族成分变更の際に記入が必要な書類 1 「贵州省公民变更民族成分证明书」  
証明書には「民族成分を变更することを許可する」という内容が記載されている

贵州省公民民族成份认同证明书存根(样式)

根据《贵州省公民民族成份登记管理实施办法》XXX(性别: ,  
身份证号码: )申请自愿认同民族成份为 族,已经审核批准,  
审批编号为: ,请在签字领取证明书后30日内到户籍所在地公安  
派出所办理民族成份变更登记。

审批部门公章

县级民族工作部门(单位公章)

年 月 日

贵州省公民民族成份认同证明书(样式)

根据《贵州省公民民族成份登记管理实施办法》XXX(性别: ,  
身份证号码: )申请自愿认同民族成份为 族,已经审核批准,  
审批编号为: ,请在签字领取证明书后30日内到户籍所在地公安  
派出所办理民族成份变更登记。

审批部门公章

县级民族工作部门(单位公章)

年 月 日

图14 民族成分变更の際に記入必要な書類2「贵州省公民民族成分認同証明書」  
証明書には「自発的に〇〇族に変更したい意思が批准された」という内容が記載されている

しかし、しばらくして後に、その政策は中止された。中止に関する資料は入手できなかったが、インタビュー対象者の李崇敬<sup>74</sup>の話から、中止決定の経緯がわかった。贵州省民族宗教局は2012年頃「穿青人の民族意識」について調査したが、その調査は、多くの人に誤解され、結局、「今民族を変えないと、今後は強制的に漢族に変更させられる」という噂になった。そのため、2014年、贵州省民族宗教局が通知を出した後、子供のために、多くの方は民族変更の手続きをした。2014年の通知に対し、穿青人内部一部の人は「それは我らの長年の闘争の勝利」であると考えていたが、より多くの長老や知識人は「この政策は意図的に穿青人を分裂しようというもの」と考え、政府に批判的な声をあげた。また、他の民族からも「どうして穿青人は民族成分を選べるのか、それは不公平である」との指摘があった。その結果、2016年には、この政策は取り消された。

<sup>74</sup> インタビューは、2019年1月16日、織金県で行った。

公式には取り消されたこの政策だが、実際には続いている。織金県民族宗教局により、2016年2月から7月までで、民族変更した世帯数は3061戸で、3月から7月の間で、個人で民族変更したのは、556人だった。人数は少ないが、変更を希望すればできる。実際、筆者が織金県民族宗教局に行った時も民族変更しに来た人がいた。その家庭は、「子供のために変更しに来た」と述べ、他の民族になれば今後ずっと優遇政策を受けられるという安心感を求めるために民族変更したいと話した。

このように、国の平穏を保つため、中華人民共和国成立以降穿青人に対する方針が何度も変わった。その変化の過程は、外部の認識と穿青人内部の認識が衝突しているから発生したものと言える。

最初、穿青人は漢族として認定されたが、穿青人集団に反対されたため、二回目の民族識別工作を実施した。しかし、1986年国家民族委員会党組が提出した方針によって、穿青人が単一民族として承認されるのが不可能になり、しかも1986年2月の公安部の通知により身分証の民族成分も漢族に変更させられる動きがあった。貴州省政府の関係で公安部の通知は実施されなかったが、その時期中央政府の「穿青人を漢族にさせる」とする方針が見られる。また、「穿青人」という民族成分を承認したものの、その民族コードは貴州省内に限られた。また、穿青人が周辺の少数民族に民族変更できるようにした政策からは、政府側が穿青人を分化させ、既存の民族に吸収させることによって、これ以上の民族を増やしたくないという意図が見受けられる。このような政策中、穿青人自身は、自らの民族成分についてどのような考えを持っていたのか。

### 第三節 穿青人内部の認識

#### 1. 「穿青人」としての自己認識

現地で調査した結果、年配の人や知識人、長老たちは「穿青人」の身分に対し強い誇りを持ち、「絶対に変えない」と強い意思を表明することがわかった。また、県中心から離れている以那鎮や桂果鎮にも、自らは穿青人であると主張している人は多く存在する。

李発春<sup>75</sup>は、「我らは穿青人である。漢族ではなく、貴州省の土着民でもない。識別報告の結果はどうであろうと、政府の政策がどうであろうとも、我らは穿青人である事実は変わらない。私は、国から単一民族として認定されることを求めているのではなく、そもそもそのことも非現実的である。私は、ただ『穿青人』という集団は存在していることを承認してもらいたい。この国に生きてきた私たちは、なんで今さら他の民族に変更しなければならないのか」と話した。また、「別に私は優遇政策を求めるために承認されたいのではない。その（大学入学試験にプラスされた）20点<sup>76</sup>のために、自分の先祖を変えたりして、他の民族になったりして、それは本当に良いことと思う？そもそも大学試験は実力を測る場でもあり、そんなモノの関係でいい点数取れたら嬉しい？」として、自分は単に「穿青人」の身分を認めてもらいたい、決して優遇政策のために穿青人を主張したのではないと宣言した。2014年の民族変更政策に対して、彼は「今は民族変更できるような政策があるが、そもそも生活習慣も文化も風俗も違うし、ただの呼称変更にはどんな意味があるのか？そもそも共産党は民族平等と主張しているが、なんで穿青人の場合は他の民族に変更する必要があるのか？それは、一種の民族同化政策ではないか？」と強い口調で述べた。

<sup>75</sup> インタビューは、2018年9月13日、織金県で行った。

<sup>76</sup> 少数民族優遇政策の1つは、少数民族であれば、大学入試試験の最終採点に点数がプラスされる。具体的な点数は、各省の政策により異なる。貴州省織金県出身の少数民族が貴州省省内の大学に出願する場合は、20点がプラスされる。

元織金県の幹部であった李隆彦<sup>77</sup>も、似たような主張を持っている。さらに、李は「当時、貴州省のリーダーが織金県に来て、穿青人を土家族<sup>トゥチヤ</sup>に変更してはと勧めた。しかしそれは口頭で話したから、それに関する記載はない」と話し、民族変更政策の同化性を批判した。「政府は、民衆がその政策に反抗することを心配したため、民族変更工作を中止した。それは、民族と政府の間に矛盾が生じないように行った行動である。しかし、今でも他の民族に変更する人がいる、彼らの変更先の民族はバラバラである」と李が話した。

李崇敬は、織金県李氏協会<sup>リシ</sup>会長を務めている人である。彼も穿青人と自己認識しているが、民族変更政策に対する態度は、先の2人と違う。李は「私自身は絶対に民族変更しない、そしてその政策にも反対する。ただ、協会内部の人がどうしても民族成分を変更したいのであれば、私は止めない。その場合、私は似たような部分があるイ族か土家族に変更するのを勧める」と話した。

また、民族変更したとしても、自分は穿青人であると認識している人もいる。「国家政策を守るために、民族成分を変更した」と語ってくれた李隆浩<sup>78</sup>は、今織金県に在住している。彼は民族成分を変えたが、家にはまだ五顯神<sup>ウシエンシエン</sup>を祭祀している。「ただ身分証の記載が変わっただけで、私が穿青人であることに何も影響しない」と彼は話した。

このように、一部の穿青人は、代々伝承して来た「穿青人」という身分を守ろうとしている。彼らは、政策的な優遇より、1つの民族であることを認められたいのである。そして、民族変更した人の中にも、穿青人と自己認識している人がいる。しかし、それは穿青人全員が持っている考えではない。穿青人内部には、「漢族」と自己認識している人もいると楊然（2006）は指摘している。

## 2. 「漢民族」としての自己認識

楊然は、穿青人内部にも、「少数民族から脱離し、漢族籍に加入する」という声が存在すると指摘したが、筆者が二回調査した限りでは、そのような意見を持っている人には出会わなかった。ここでは楊が挙げた例を引用する。

「…現在（2006年）貴州省財政庁長を務めている李隆昌<sup>77</sup>は穿青人である…彼は、少数民族として差別を受けるよりは、政府に認定された漢族の身分を受け入れた方がいいと考えている…また、清鎮第一小学校校長を務めた楊正兵<sup>78</sup>は、穿青人と漢族とは何も違わないと主張し…清鎮の穿青人は漢族と同じな経済力や文化を持っている…」（楊、2006、p108）

同じ知識人の中でも、自らの民族成分に対する認識は異なっている。では、その2つの考え以外、民族成分について他の考えはあるのか。

## 3. 「民族成分」にこだわりがないという考え方

<sup>77</sup> インタビューは、2018年9月13日、織金県で行った。

<sup>78</sup> インタビューは、2019年1月18日、織金県で行った。



調査では、多くの若者は民族成分にこだわりがない。

李燕萍<sup>79</sup>は、現在織金県に民宿を経営している。初回インタビューした時、彼女は、「私は穿青人で、別に民族成分変更は必要ない」と返答したが、二回目のインタビューでは「まあ、正直私たち（穿青人）と漢族とは何が違うのかについて、私もわからない。ただ、まわりの親戚は皆民族成分を変更しないから、私も変えない。まあ、仮に本当に変えなければならぬ時が来たら、その時は親戚と同じ民族に変更するかな」と言った。

小盧<sup>80</sup>は、桂果鎮出身で、今は貴陽市で青果店を経営している。「正直、私の代になって、穿青人のことはほぼわからない。ただ親からそれ（民族成分）を継承しただけ。別に他の民族になっても構わないと思うけど。今の時代には、どんな民族であっても、商売の難しさは一緒だから…」と盧が話した。

このように、穿青人文化や風俗に馴染んでいない若者は、穿青人という集団への帰属意識が弱い。彼らにとって、「優遇政策があれば別にどんな民族でもいい、むしろ他の少数民族になった方がより安心して優遇政策を受けられる」（小盧）。

自民族の文化や風俗に対する理解程度が異なるため、自らの民族成分について、穿青人内部にも統一した見解がない。若者の中には、小盧や李燕萍みたいにあまり穿青人の文化を知らない人もいれば、李玉誌<sup>81</sup>みたいに熱心に穿青人の資料を収集し、「穿青之家」というサイトを運営している人もいる。しかし、調査した結果によれば、李燕萍が代表する「民族成分にこだわりがない人」が多いとわかった。多くの人は、彼女みたいに、まわりの人と一致するために民族成分を変更しなかった。

このように、形成した時から漢族と非漢族の二重性を持っている穿青人は、国から受けた政策も時期により異なる。外部からの認識が多様である以外、穿青人内部の自己認識も一致していない。「漢族」から「非漢族」、そして「未識別民族」に分類されるようになった穿青人は、長い歴史の中、どのように自らのアイデンティティを維持できたのか。そのアイデンティティはどのように構築されてきたのか。続いての第三章では、服装、信仰の2つの方面から彼らのアイデンティティの構築過程を解明し、今後、彼らのアイデンティティはどのように発展するのかを分析していきたい。

---

<sup>79</sup> 初回インタビューは、2018年9月15日、織金県で行った。二回目のインタビューは、2019年1月15日に行った。

<sup>80</sup> 被調査者の希望により、ここではニックネームを採用。インタビューは、2019年1月18日、織金県桂果鎮で行った。

### 第三章 穿青人アイデンティティの構築

#### 第一節 服装

##### 1. 穿青人服装の特徴

まずは穿青人の服装の特徴について紹介していきたい。

前述の通り、穿青人は、チン色の服を着ているため、周りの民族からそう呼ばれた。チン色以外、彼らの服装には以下のような特徴が見られる。

穿青人の婦人の服は、「三節袖両節衣」(図 15) を着用している。名前の通り、服の袖は、3つの段になっている、襟は二重となっている。チン色の上着は腰まで、そしてスカートは藍色で、膝下までだ。上着の最下部は白い布が縫われている、襟と袖口には鉤状雲の柄がついている。襟は二重または三重となっており、一番高いのは真ん中の2.5寸<sup>81</sup>で、残りの2つはそれより少し低めである。着用の際には襟を肩に翻す。ウエストには、チン色の腰帯を使う。

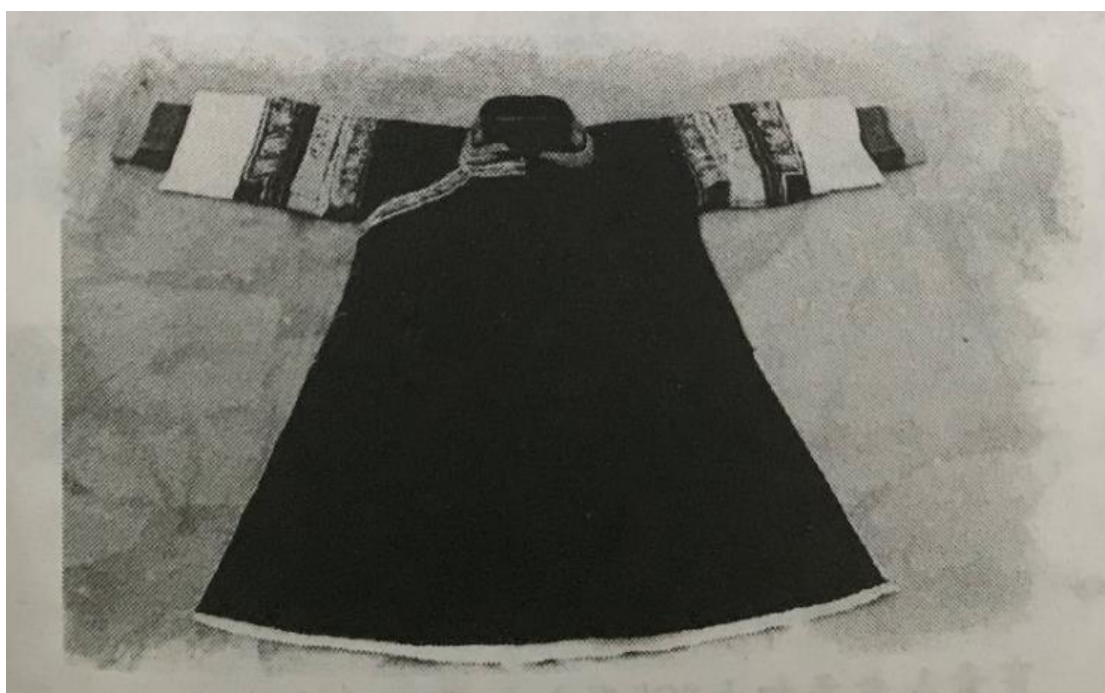
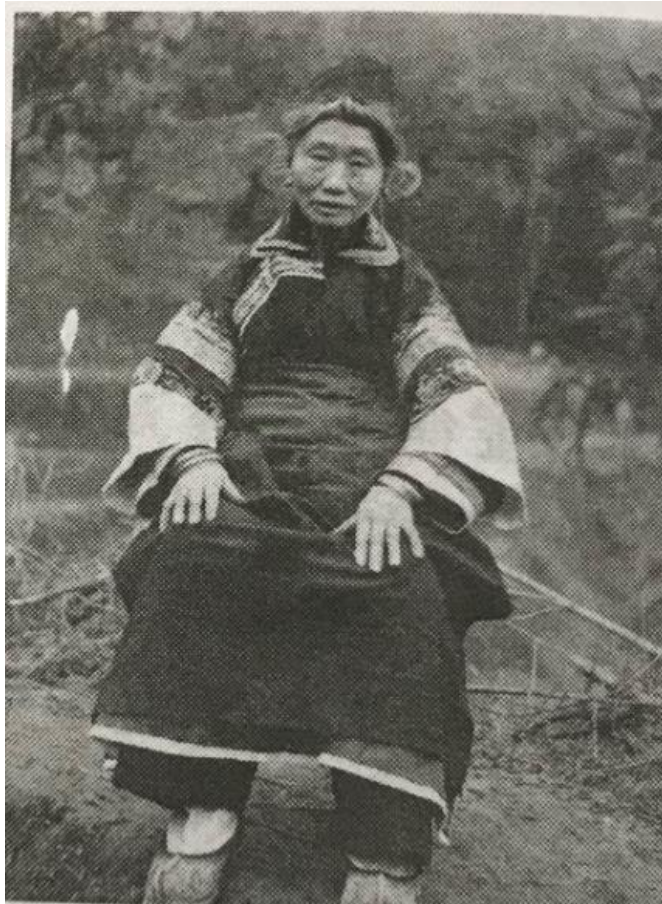


図 15 服の上着 出典 陳宏枢『穿青人の穿青人歴史与文化』

<sup>81</sup> 1 寸はおよそ 3 センチである。



図 16 中華人民共和国建国前の穿青人婦人の写真 出典 陳宏枢『穿青人の穿青人歴史与文



化』  
図 17 1980年代穿青人婦人の写真 出典 陳宏枢『穿青人の穿青人歴史与文化』

未婚女性の服は、また異なっている。未婚女性の服は、三段になった袖ではなく、袖は一重である<sup>82</sup>。袖口には、白い布か鉤状雲<sup>かぎじょううん</sup>の柄がついている。下半身はスカートではなくズボンを履く。

男性の服装については、図 18 のように、年配の人はチン色の長衫<sup>ながうわぎ</sup><sup>83</sup>や腰帯を着用、下半身は太いズボンを履く。



図 18 穿青人男性の服装

出典 澎湃新聞 (2014) 「只占 1.2%，穿青人為何不願改為漢族？」<sup>84</sup>

しかし、似ているような服装は、他のエスニックグループの中にも見られる。貴州省に

<sup>82</sup> 袖に関しては 2 つの言い方がある。陳 (2004) は二重であると指摘したが、楊然 (2006) は袖は一重しかないと指摘した。ここでは、楊の意見を採用。

<sup>83</sup> 着丈が長い服 (ほぼかかとまで)。

<sup>84</sup> [https://www.thepaper.cn/newsDetail\\_forward\\_1253793](https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_1253793) 最終アクセス 2019 年 11 月 19 日。

は、「穿青<sup>ダトシバオ</sup>大屯堡、屯堡<sup>シャオ</sup>小穿青」の諺があり、穿青人と屯堡人の服装が類似していることがこの諺から読み取れる。塚田（2004）は、屯堡人とノ・ス<sup>85</sup>、里民の既婚女性の服装を比べた結果、差異はあるが基本的には似ていて、その3つの集団の服装は、ほぼチン色であると指摘した。



図 19 天龍鎮屯堡人の服装

出典 塚田誠之（2001）『『屯軍の末裔』たち—貴州における移住と民族の生成』

<sup>85</sup> 一部イ族土司の自称。



図 20 里民の服装

出典 塚田誠之 (2001) 『『屯軍の末裔』たち—貴州における移住と民族の生成』



図 21 塚田によりノ・スの服装

出典 塚田誠之 (2001) 『『屯軍の末裔』たち—貴州における移住と民族の生成』



図 22 鳥居龍蔵が撮影した「里民子」の女性  
出典 塚田誠之 (2001) 『『屯軍の末裔』たち—貴州における移住と民族の生成』

名乗りが違っているこれらの 3 集団が、類似した服装を持っているのはどうしてだろうか。それは、漢族との関わりがあるからと推測できる。そもそも、里民の前身である里民子は、第一章に述べたように、漢族の影響を受けた集団である。屯堡人は「屯軍の末裔」として自己認識し、自らは漢族であるとしている。ノ・スの場合について、塚田は、『ノ・ス』の『里民』に似た服飾は、必ずしも『伝統的』なものと限らないであろう。『里民』と接触してその影響を受けた可能性があるからである」と判断した(塚田、2001、p287)。

このような漢族文化の影響を受けて形成された服装は、穿青人アイデンティティの構築にどのような影響を与えたのか。

## 2. 「服装」の穿青人アイデンティティへの影響

### (1) 穿青人が形成された時期

鄧<sup>とう</sup>は、服装が民族集団の形成に果たした役割について、「…服装は、同じ集団の人たちの自民族文化への一体感を強化した…」と説明した(鄧、2011、p18)。穿青人の場合にも、このような特性が見られる。

第一章に述べたように、「土人」に関する記録が初めて出たのは、明初の時であった。その時の記載の中には、まだ「チン色」の話が出ていない。その服に触れた史料は、清道光年間の記録である。呉三桂が水西の軍事活動を記載した「水西伝」<sup>86</sup>を参考にし、彼らのチン色の服装が外部から集団的特徴とされた時期は、一番早くても康熙三年<sup>87</sup>の話になると推測できる。いわゆる、それ以前、穿青人の「チン色」の服装はシンボルとして見られてなかった。そのことは、それ以前の「百苗図」にある「土人」「里民子」の服がバラバラであったことから解釈できる<sup>88</sup>。

そもそも、「土人」の記載と一緒に出たのは、服装ではなく、信仰である「五頭神」であった。穿青人道士<sup>89</sup>を務めた張如舟<sup>90</sup>は「元々、貴陽市には五頭神を祭祀する

『五頭廟』<sup>ウシエンシエンミョウ</sup>があったが、明代後期になり、多くの穿青人は貴陽市を離れたため、貴陽に戻ることや五頭廟で祭祀を行うのが難しくなった」と話した。その話は、穿青人の移動ルートとは一致している。このように、少なくとも康熙時代まで、そのチン色の服装は彼らのシンボルになっておらず、彼らのアイデンティティを構築したのは、五頭神という信仰であった。

ではその服装がシンボルになったのは、どのような原因があったからだろうか。それは、2つの推測ができる。1つ目は、外部からの脅威、いわゆる呉三桂の軍事活動と関係あるという推測である。前文チン色の服装に関する伝説にも述べていたように、穿青人は、呉三桂に殺されないように、チン色を使い、自らの漢民族性を強調した。また、「穿青」という用語が初めて出たのは「水西伝」であり、呉三桂に反抗する少数民族として扱われた。

続いて、2つ目は道光年間イ族に反抗するために、服の色が民族特徴として使われ、その後シンボルになったという推測である。そのチン色の服が彼らの集団的特徴であると記載された最初の文献は、道光年間<sup>91</sup>の『安平県誌』である。嘉慶年間の記録にはまだ現れていなかったその特徴が道光年間に記載されるようになった理由はなんだろうか。ここでは『調査報告』の記載を引用して分析しよう。『調査報告』によれば、道光年間において、穿青人地主の勢力が急速に成長したが、その成長の過程で、彼らは元々その地域の経済を支配したイ族土司に差別された。土司の経済的な支配に反抗するため、穿青人はそのチン色の服装を強調し、自分たちは漢族であると主張、穿藍人<sup>チュアンランレン</sup><sup>92</sup>地主と協力した。この時期、服装は穿青人集団の漢族としてのアイデンティティを強化した。

このように、「チン色」という服色は、「土人」集団が形成された頃にはまだ一種のエスニックシンボルとして扱われなかった。彼らが少数民族地域に移住した後、外部と対抗することにより、一種のエスニックシンボルとされ、彼らのアイデンティティを強化した。その服の色がアイデンティティに影響し、アイデンティティを構築するようになったのは、早くても康熙三年、遅ければ道光年間と推測できる。では、その服の色がアイデンティティに最も影響したのはどんな時期なのか、それは、どんな背景があったからなのか。

<sup>86</sup> 水西地域の民間記録。

<sup>87</sup> 1664年。

<sup>88</sup> 前述の通り、「土人」「里民子」に関する記載の中、服装に関する記載は一貫していない。

<sup>89</sup> 織金県には、穿青人道士と漢族道士が分かれており、穿青人道士は、「跳菩薩」の儀式を務める人で、普段は自分の職を持ち、跳菩薩の期間になったら道士になり儀式を行う。

<sup>90</sup> インタビューは、2019年1月13日、織金県以那鎮で行った。年のため、彼は現在は引退した。その仕事を引き継いだのは彼の息子である張志超である。

<sup>91</sup> 1821年-1850年。

<sup>92</sup> 藍色の服を着る人々。



## (2) 穿藍人との差異を強調する時期

まずは穿藍人について少し触れておこう。第一章第三節の『穿青人』の名の由来」で既に紹介したように、穿藍人は穿青人より後に来た漢族である。彼らは清の時期官僚として派遣され、あるいは商売をしに水西地域に行き、定着した人である。彼らは、比較的裕福で、権力を持っている。服色はチン色ではなく、きれいな藍色であった。そして、穿青人の婦人が纏足しないのと違い、穿藍人の婦人は纏足する。また、居住地に関して、穿青人は農耕に就いていたため、ほぼ街から離れたところに居住しているが、商売を中心とする穿藍人は県城に住んでいた。

清末民国初になると、大量の物資が外部から貴州省に流入した。それ故に、当地の自給自足の経済体系が維持できなくなり、代わりに商品経済が発展した。商品経済の発展により、街場<sup>93</sup>の数や開催頻度が増えた。当時、街場を支配したのは、穿藍人であった。穿藍人は、外部との繋がりを持っているため、コストが安い大量の商品を当地に輸入できた。穿青人が生産した農産物は高価で売れず、経済的な差が徐々に大きくなった。このような動きは、納雍大兔場<sup>のうようだいとしょう</sup>の支配者の変化からも見られる。前述の通り、イ族土司の経済的な支配に反抗するため、穿青人と穿藍人と一緒に納雍大兔場を立てた。最初、大兔場を支配したのは穿青人であったが、その後市場経済の発展により、支配権は穿藍人に移った。

このような経済的な格差により、穿青人と穿藍人との間の衝突が激しくなった。穿青人は穿藍人を「野狗精」<sup>イエゴウジン</sup><sup>94</sup>、穿藍人は穿青人を「通背猴」<sup>トンベイホウ</sup><sup>95</sup>と呼んでいた。双方の間には暴力沙汰があり、お互いのことを蔑称で呼んだりした。『調査報告』には、民国二十年<sup>96</sup>大定猫場<sup>マオチャン</sup>における穿青人と穿藍人間の衝突事件の例がる。当時、穿藍人は「…猫場には人がいる、お前らサルたちをすべてぶっ殺す…」を標語にし、それに対し穿青人は「…猫場には犬が現れ、全ての街道を占領した。俺はお前ら犬たちをすべて殺してみせる」を標語にした。その直後、2つの集団の間には衝突が激しくなり、ついに殴り合いが始まった。

穿藍人と衝突する中、相手の所属集団を確認できたのは、他でもなく、その服の色である。その理由は他のエスニックシンボルより、服の色の方がよりわかりやすいからである。このように、穿青人は穿藍人と差をつけたいため、外部からもわかりやすい自らのチン色の服の色を強調し、穿藍人に対抗した。穿藍人に対抗する過程で、穿青人集団としてのアイデンティティが強化された。

このように、外部と対抗することにより、穿青人のチン色の服装がエスニックシンボルとして扱われ、穿青人アイデンティティの構築に影響を与えた。しかし、服装によって構築されたのは、必ずしも非漢族的なアイデンティティでもない。政治環境や他の民族との関係性により、時には漢族としてのアイデンティティを強化し、時には非漢族としてのアイデンティティを強化させた。

では、穿青人アイデンティティの構築に影響を与えた服装は、現代はどうなっているのか。

## 3. 服装の現状

<sup>93</sup> 定期的に開く市場。

<sup>94</sup> 一種の蔑称であり、野良犬を意味する。

<sup>95</sup> 蔑称であり、サルを意味する。

<sup>96</sup> 西暦 1931 年。

前述の通り、現在、穿青人の服装を保有している家庭は少ない。桂果鎮<sup>けいかちん</sup>の政務服務中心の弁公室主任を務めている<sup>しんぎょうか</sup>97 謹業華<sup>しんぎょうか</sup>98によれば、十数年前にはまだ服装を着用する人が多かったが、十年前の遷移政策<sup>99</sup>により、機能性、特に保温性が弱い伝統服装を捨てた人が多い。また、当地は亡くなった人の日常用品をすべて燃やす習俗があるため、死者が使ったものはほぼ保有していない。その他、政府の経済開発により、穿青人と穿藍人の経済的な格差が緩和され、服装が持っている外部と区別する機能やアイデンティティを強化させる機能が失われてきたのも、服装を捨てた原因の1つであると考えられる。

謹によれば、現在、民間には服装を保有している人が殆どなく、山奥の僻地に行かないと伝統服装は見かけないという。実際、筆者が調査した地域では、服装を保留している人は水壩村<sup>すいぼそん</sup>にしかいなかった。桂果鎮から水壩村に行くにはバスがなく、車でも20分くらいかかる。そんな僻地のところにおいても、服装を保有しているのは一世帯しかいない。しかも、現在保有しているのは、文献に記載されているような派手なものではない(図23)。



図 23 水壩村で見つけた服装 水壩村、2019年1月、筆者撮影

また、当地の観光活動を促進させるため、2014年桂果鎮政府とある企業が協力し、「穿

<sup>97</sup> 2019年1月時点。

<sup>98</sup> インタビューは、2019年1月17日、織金県桂果鎮で行った。

<sup>99</sup> 遷移政策とは、政府による交通不便なところに分散居住している村落を、道路近くに移住させることである。その政策により、元々規模の小さい村落が合併し、一個の大きな村落(あるいは鎮)になる。

青人文化小鎮」という企画を出した。その時「穿青人服装ミュージアム」という施設が建てられたが、その後資金不足や観光客が少ないため、企業が倒産し、穿青人服装ミュージアムも開放されなくなった。調査の時には政府の協力を得られ、中を見学できたが、そこに陳列されているのは、穿青人の伝統服装ではない（図 24）。諺によれば、中にある服装は、当時他の民族のデザイナーに頼んで作られたものである。



図 24 穿青人服装ミュージアム 桂果鎮、2019 年 1 月、筆者撮影

このように、現在穿青人の伝統服装を保留している人は少ない。そして現在保留している服装も、文献の記録内容とは異なる。服装ミュージアムに陳列しているのも穿青人の伝統服装ではなく、現代社会で作られたものである。このような現状である服装は、穿青人のアイデンティティにまだ影響しているとは言い難い。では服装以外のもう 1 つのエスニックシンボルである五頭神という信仰の現状はどうなっているのか。次に五頭神についてみていこう。

## 第二節 信仰

### 1. 穿青人の<sup>ウシエンシエン</sup>五頭神の伝説

五頭神を祭祀する理由についてはこのような伝説がある。穿青人の先祖が兵士に追われた時に、河についたが、船がないため河を渡れない。その際、船を漕いでいる 5 人が現れ、彼らを河の対岸まで送った。対岸には、人影は全然見えなくて、食品も水も何も持ってない彼らは、何をすればよいのか、どうすれば食事できるのかを考えていた。その際、草を食っている豚が彼らの目に入った。そして豚を捕まえようとしたとき、山の上にあるお寺を発見した。彼らは、泊まる場所がないため、豚を持ってお寺に入った。中に入ると、お寺に祀っている神像は、先の 5 人だった。命の恩人に感謝するため、彼らは五頭神を祀りはじめた。

五頭神を祭祀するため、家に<sup>ウシエンダン</sup>五頭壇は必ず置いてある。その五頭壇は、五頭廟に行けなくなったから生じたものである。前節の第二部分で述べた張如舟による五頭廟についての話のように、穿青人の移住により、彼らは貴陽市から遠く離れ、村落もバラバラになった。貴陽に祭祀に行くことが難しくなった結果、穿青人の先祖は「廟で祀るより、家で祀る方がより便利だ」から家に五頭壇を置くことを提案した。彼らは「五頭廟」の祭壇の灰を小

さい容器に入れ、その容器を各家まで持って帰り、祭祀をはじめた。その容器は、「五頭壇」<sup>100</sup>と呼ばれる。その際、穿青人の先祖たちは、「この壇は我らのシンボルである、必ず代々伝承させる」と約束した。

そのため、子供と分居したら、必ず「跳菩薩」<sup>101</sup>の儀式をやり、五頭壇を数個（成年男性の人数分）に分ける<sup>102</sup>。五頭壇を家に置いたら、そのままずっと動かさない。よって、家の五頭壇の有無でその人が本当の穿青人か否かを判断できる。

では、祭典である跳菩薩は、どんな流れで行われているのか。その開催の時間や目的はなんだろうか。

## 2. 穿青人の五頭神の祭祀

### (1) 祭祀の開催時間と開催目的

「跳菩薩」<sup>103</sup>は、毎年の旧暦の9月28日から12月末までの間に行われる行事であり、分壇や祖先祭祀、これからの福を祈ること、占い<sup>103</sup>、運を借りる<sup>104</sup>などの役割を持っている。現在、「跳菩薩」はほぼ2日1夜<sup>105</sup>で、合計15のシーンを演じる。

### (2) 祭祀の主体を担う「道士」

「跳菩薩」を担っているのは、「先生」と呼ばれる道士たちである。

現地では、道教先生以外に、儒教や仏教の先生もいるが、「跳菩薩」ができるのは、穿青人の道教先生のみである。道士の伝承については、勉強したい人が道士の弟子になり、師匠からの許可をもらって法事を執り行うことができるが、師の一門に入っていないと誰にも雇われない。弟子は全部の知識を勉強でき、自分で跳菩薩ができたなら、跳菩薩が開催された際に「伝度」<sup>106</sup>というシーンを設け、弟子を「度職」<sup>106</sup>する。その際は、施主の許可が必要であり、弟子は跳菩薩の一部費用を負担する。

---

<sup>100</sup> 現在、五頭壇の中には、お米、硬貨などが入っている。

<sup>101</sup> 五頭神を祭祀するための儼劇。

<sup>102</sup> それは、「分壇（ぶんだん）」と呼ばれる。

<sup>103</sup> やりたいことができるか否かを占う。

<sup>104</sup> 「跳菩薩」の最後の段階で、施主が「〇〇年の運を借りたい」と叫ぶ。

<sup>105</sup> 民間の伝説によれば、以前において、「跳菩薩」は7日7夜をかける。筆者が参加した跳菩薩は1月12日の21時から、14日の4時までの間に行われた。現在跳菩薩はほぼこのように31時間連続で演じる。

<sup>106</sup> 正式に職を務めることを認める。



図 25 掌壇師の間に伝承する跳菩薩のやり方 織金県、2019年1月、筆者撮影

張志超<sup>107</sup> (道士) の話によると、現在道士をやっている人は、普段はほぼ農業や外地へ出稼ぎに行っている。道士の間の集まりは偶にあるが、その際はほぼ日常会話しか話さない。なお、道士は師門の違いによって、法事を執り行う地域も異なってくる<sup>108</sup>。

### (3) 祭祀の流れ

祭祀が始まる前には、まず「設壇」<sup>せつだん</sup><sup>109</sup>をして、会場を整える。



図 26 跳菩薩を行われる場所の飾り 織金県、2019年1月、筆者撮影

「設壇」の準備が終わったら、その日の夜の21時から跳菩薩が始まる。跳菩薩は、開壇<sup>カマイトアン</sup>

<sup>107</sup> インタビューは、2018年9月15日、織金県以那鎮で行った。

<sup>108</sup> 調査したところ、師門が違っていれば、その演出の形式も異なってくる。

<sup>109</sup> 五顯神の画像などを飾り、跳菩薩の時に必要な道具を置く。

→<sup>ファゴンツァオ</sup>発功曹→<sup>チイアホシイン</sup>交 牲→<sup>チインシエンシイアマア</sup>請 神 下 馬→<sup>ファンビン</sup>放 兵→<sup>フカーフウイ</sup>合 会→<sup>ダァーラン ディエン</sup>大 郎 殿→<sup>ユインショウ ディエン</sup>雲 魁 殿→<sup>アァラン</sup>二 郎

殿→<sup>ディエン スカフウー ディエン</sup>四 府 殿→<sup>ユエワン ディエン</sup>岳 王 殿→<sup>リンフウー ディエン</sup>靈 浮 殿→<sup>サンショウ ディエン</sup>山 魁 殿→<sup>ナァンイェウ ディエン</sup>南 游 殿→<sup>シウエイショウ ディエン</sup>水 魁 殿の順番

で行われ、各段階の中にもいくつ違うシーンを演出する。

開壇 (図 27)、または「起壇」とも呼ばれる。この段階には「壇場の掃除」「起壇」などの部分に分かれている。<sup>チァンタンシ</sup>掌 壇 師<sup>110</sup>が祭典用の衣装を着用、今回の祭祀の目的を神に報告する。



図 27 開壇 織金県、2019 年 1 月、筆者撮影

発功曹には、掌壇師が各神に祭祀した後、御札を燃やし、功曹を各神の住所に派遣し、五頭神の友を誘う (図 28)。

<sup>110</sup> 跳菩薩の祭典を主導する人。



図 28 発功曹 織金県、2019年1月、筆者撮影

交牲は、「<sup>チンシェンリンシヤン</sup>請聖領牲」「交牲」「<sup>ジェフウエイ</sup>解穢」「<sup>ツァンツァオ</sup>参竈」の4つのシーンに分かれている。祭祀用の豚や羊<sup>111</sup>を法壇近くで屠る。刀を持つ人はお面を被り、いくつかの動作を演出してから屠り始める。

請神下馬は、屠った豚をきれいに洗った後、豚の頭を部屋の外に向かって神に捧ぐ（図29）。

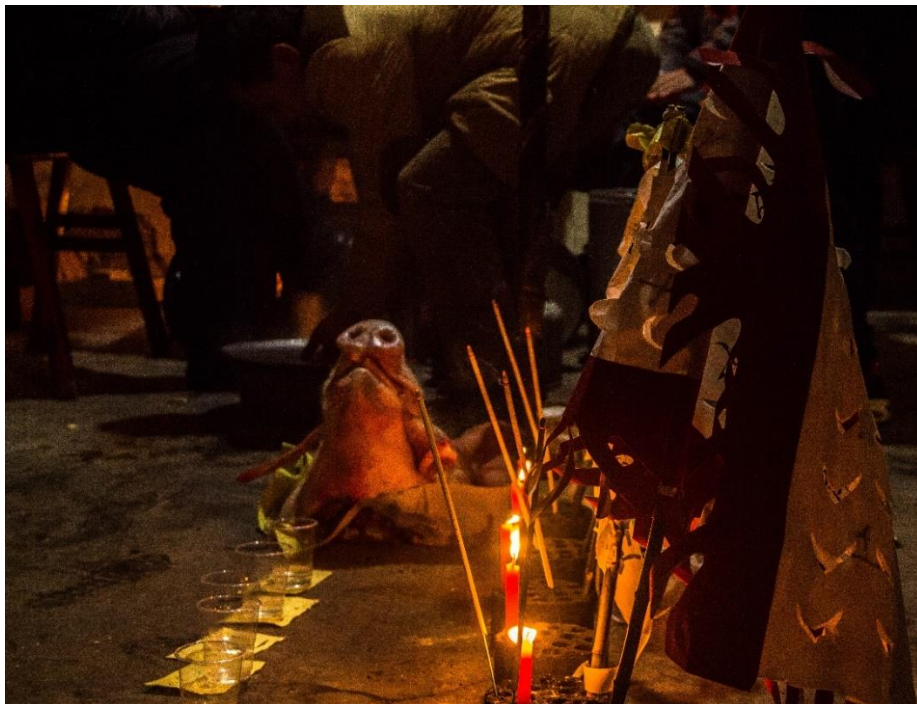


図 29 請神下馬 織金県、2019年1月、筆者撮影

<sup>111</sup> 筆者が参加したときは、豚のみだった。

放兵は、「<sup>リイエンピン</sup>練兵」「<sup>デアオピン</sup>調兵」「<sup>チアオチー</sup>招旗」「<sup>ファンピン</sup>放兵」に分かれ、兵士たちが集まり各シーンを演出する。この段階には、二人の道士が衣装を着用し、踊りをする。

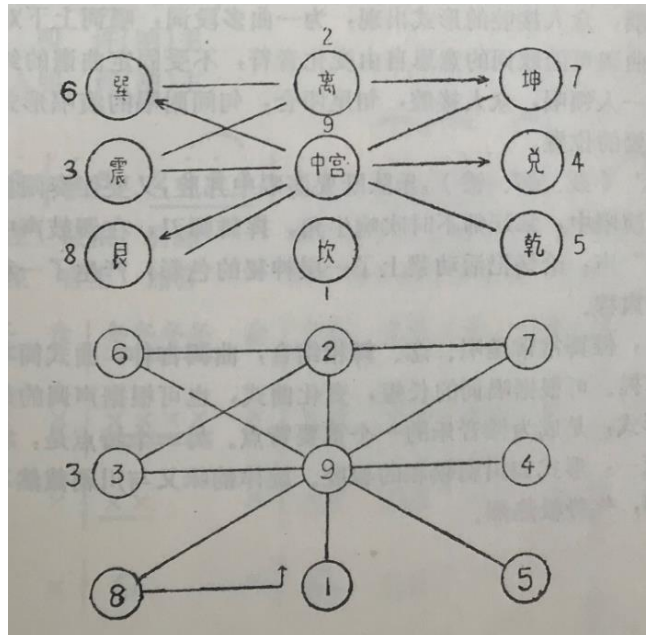


図 30 踊る時の歩き方

出典 『中国民族民間舞蹈集成 貴州省畢節地区 織金県巻』

合会は、「<sup>ツァオチアオ</sup>造橋」「<sup>ニイエンジャン</sup>捻香<sup>112</sup>」「合会」に分かれ、五頭神の友人や兵士を五頭神の近くに送るために、ベンチを雲に見立てて、橋を作る。

大郎殿には、「武劇」とも呼ばれ、アクションシーンが多い。大郎殿で遊ぶために、五頭神は「<sup>りょうざん</sup>梁山先鋒」である<sup>ほうひつ</sup>方弼、<sup>ほうそう</sup>方相を先鋒に任命し、行く途中の邪鬼を退治する。このシーンでは、施主の厄払いもできる。

雲魁殿は、「<sup>インシイエンニヤン</sup>迎仙娘」「<sup>シイー</sup>戲仙娘」に分かれ、「<sup>ぞくだん</sup>俗壇」とも呼ばれる。このシーンは、子孫繁衍の性的な過程が描かている。このシーンには、卑猥な言葉が続々と出てくる。それは、「俗っぽいほど、神は崇らない」からである（図 31）。

<sup>112</sup> 線香を灯し、橋を渡る人たちを誘う。





図 31 仙娘は男性が演じる 織金県、2019年1月、筆者撮影

二郎殿は、二郎が得道前と得道後の違いを描くシーンである。得道前には人に迷惑ばかりかけた二郎だが、得道後には人を助け、色々な悪党と戦った。



図 32 お面を被って演出するシーンは多い 織金県、2019年1月、筆者撮影

四府殿は、五頭神が祭祀を引き受け、施主の願いを叶えてあげるシーンである。

岳王殿は、五頭神と各神と一緒に三山五岳<sup>きんざんごがく</sup><sup>113</sup>に遊ぶシーンである。

霊浮殿は、厄除けのため、霊浮殿の神が施主の家で法事をするシーンを演じる。

山魁殿は穿青人の農耕生活を演出するシーンである。このシーンはすべての人が参加で

<sup>113</sup> 三山は、道教神話の三神山（蓬莱、方丈、瀛州）を意味する。五岳は、道教の聖地である5つの山（泰山、衡山、嵩山、華山、恒山）の総称である。

き、歌や踊りをする。このシーンは神を祭祀するシーンでもありながら、穿青人の先祖の農耕生活を再現するシーンでもある。

南游殿は、五頭神と各少数民族の先祖（または神）と会談するシーンである。

掌坛师及众道士法事演唱曲调

曲一 (祭 拜 舞)

传授：潘正远  
记谱：杜世忠

$\frac{2}{4}$

$\dot{3} \underline{5} \quad \underline{\dot{2} \dot{3} \dot{3} \dot{2}} \quad | \quad \underline{\dot{1} \dot{6} \dot{5}} \quad \underline{5 \ 5} \quad |$   
 领：行船 走(呐)水 叩 许(呐)主  
 会(呐)仕之人叩 许(呐)主

$\underline{\dot{3} \dot{5} \dot{3} \dot{2}} \quad \underline{\dot{1} \dot{2} \dot{1}} \quad | \quad \underline{\dot{1} \dot{5}} \quad \underline{\dot{2} \dot{3} \dot{2} \dot{3}} \quad | \quad \underline{\dot{1} \dot{3}} \quad \underline{\dot{2} \dot{3} \dot{2} \dot{3}} \quad | \quad \underline{\dot{1} \dot{5}} \quad 5 \quad |$  锣鼓

众：叩(呐) 许 主 波浪 消除 得(呐)清(呐)平 (呐)  
 叩(呐) 许 主 官上 加官 职(呐)不(呐)轻 (呐)

口读谱

	<u>冬冬冬冬</u>	仓	<u>冬冬冬冬</u>	仓	<u>冬冬</u>	<u>冬冬</u>	仓	仓
鼓	<u>xxxx</u>	x	<u>xxxx</u>	x	<u>xx</u>	<u>xx</u>	<u>xx</u>	x
铙	<u>xx</u>	x	<u>xx</u>	x	<u>xx</u>	<u>xx</u>	<u>ox</u>	x
锣	o	x	o	x	<u>o</u>	<u>xx</u>	x	x
钹	<u>xxxx</u>	x	<u>xxxx</u>	x	<u>xx</u>	<u>xx</u>	<u>xx</u>	x

図 33 祭祀の時に歌う曲調の一部  
 出典 『中国民族民間舞蹈集成 貴州省畢節地区 織金県卷』

水魁殿は「辞聖」<sup>ツァン</sup>「排兵」<sup>パイビン</sup>「収兵」<sup>シウビン</sup>「収壇」<sup>シウタン</sup>などに分かれる。五頭神を送るため、施主が法壇の前に跪く、掌壇師は踊りながら歌い、米を撒く。「収壇」には、道士が紙馬、紙兵を燃やし、その灰を五頭壇に入れる。最後は白米や硬貨を五頭壇に入れ、密封する。道士が祝詞を唱えた後、開催主は五頭壇を元のところに戻し、祭典が終了する。

このように、跳菩薩は、多様な機能を持ち、そして多様なシーンを演出する祭典である。跳菩薩は穿青人の代表的な風俗であり、開催の時には近所の人や親戚が集まってくる。原則的に穿青人しか参加できない跳菩薩を機に、近所関係や親戚との繋がりが深まり、穿青人としての自己認識もより強化される。

では、このような五頭神信仰は、どのように穿青人アイデンティティに影響したのだろうか。

### 3. 五頭神信仰の穿青人アイデンティティへの影響

前述のように、明代万暦年間から既に五頭神に関する記載<sup>114</sup>があった。他者による「土人」集団への観察であるこの記載は、民間伝説における「五頭壇」の出現の時期と一致している。このように、五頭神の「家神化」<sup>115</sup>により、五頭壇が穿青人集団のシンボルになり、穿青人間の繋がりを強くさせたと考えられる。

中華民国の「移風易俗」と自ら服装を着用しなくなった<sup>116</sup>という2つの原因により、民国から服装を持つ人が少なくなってきた。現在、服装を持つ人はわずかしかない。筆者が取材した人の家には、殆ど服装を保留しておらず、五頭壇だけを保留している。穿青人知識人も「この五頭壇を持っていれば、その人は穿青人であると判断できる」と主張し、五頭神への信仰が彼らのアイデンティティを支えていると見られる。

このように、穿青人のアイデンティティは、明代から五頭神により構築されてきた。五頭神の「家神化により、穿青人間の繋がりが強くなり、穿青人集団の一員としてのアイデンティティがさらに強化された。その後、より明確に他の集団と区別できるように、自らの服装の特徴を強調し始めた。その動きが一番強くなったのは、清代末期穿藍人と対抗する中である。その時期、信仰より服装の特徴を強調し、外部との対抗の中で、非漢民族としてのアイデンティティが強化された。しかし、民国政府により民族服装を廃除するという政策ができ、穿青人の服装は政策的に着用禁止になってきた。

その過程で、服装によるアイデンティティへの影響力も弱まってきた。十数年前から、政府の遷移政策や経済発展により、服装は徐々に消滅していた。その代わり、歴史が古く、既に生活と密着している五頭神が改めてアイデンティティ構築の核になり、彼らのアイデンティティを維持させた。

<sup>114</sup> 郭子章『黔記』、「土人…時間とともに華夏の風俗を学んだ…9月には五頭神を祭祀する…」。

<sup>115</sup> 元々廟で祀られていた五頭神が、家に祀られるようになったその過程を、「家神化」と呼ぶ。

<sup>116</sup> 「調査報告」によれば穿藍人に差別されないように、一部の穿青人は民族服装を着用しなくなった。

## 終章

### 1. 結論

このように、現在、貴州省省内に広範囲分布している穿青人は、民族識別工作により「未識別民族」とされ、彼らは各時期においての呼称も異なる。元々土人と呼ばれた彼らは、移住や清朝の統治地域の変更により、一部が「里甲」に編入され、里民子とも呼ばれた。光緒時期<sup>117</sup>から穿青とも呼ばれたが、それは他称であり、自称ではない。「穿青」が自称になったのは、イ族土司と対抗する道光年間である、その後清末になり、穿藍人と差をつけたい時に定着した。

第一章第三節のように、史料分析した結果、穿青人は、漢族と通婚して、漢族と融合した土人の末裔であると推測できる。いわゆる、穿青人は単なる漢族の末裔でもなく、土人の末裔でもない。彼らは、土人と漢族とが融合した人たちの末裔であり、遅くとも明代万暦の時その集団は現れた。そのため、穿青人には「漢族と少数民族の特徴を同時に持っている」という特徴が見られる。彼らは、移住と再移住の過程において、他の集団と接触、融合し、複数の文化と接触した。他のエスニックグループの文化を吸収したから、彼らの「二重性」はさらに強化された。

第二章では、彼らが持っている「二重性」について紹介し、中華人民共和国成立後の穿青人民族成分問題の経緯をまとめた。漢族と少数民族の二重の属性を持っている穿青人内部でも、生活環境の違いによりエスニシティに違いが出てくる。同じ時期であっても、集団内部で求めている利益が違うことにより、内部が分化し、異なる民族成分を選択するようになったこともある。安邦彦の反乱の時期の穿青人内部における異なる動きには、まさにその特徴が表れている。居住地の漢族官府の勢力が強ければ、漢族に近寄り、居住地の少数民族の勢力が強ければ、少数民族に入り、漢族と対抗する傾向が見られる。

このような歴史があったから、穿青人の民族成分に関する考え方も「漢族である」と「少数民族である」の2つに分かれている。前述の通り、二回の調査報告とも、歴史における穿青人の民族成分の一面を肯定し、一面を否定にしていた。本論文は、このような穿青人の民族成分を判断するというより、「穿青人のアイデンティティの構築」について議論し、穿青人アイデンティティの形成や発展を明らかにしてきた。

そのため、第三章では穿青人エスニックシンボルである服装や信仰について紹介し、各時期におけるエスニックシンボルの役割を分析した。前述の通り、穿青人のアイデンティティは、明代から五頭神により構築されたと考えられる。五頭神が「家神化」したことにより、穿青人間の繋がりが強くなり、穿青人集団の一員としてのアイデンティティがさらに強化された。その後、より明確に他の集団と区別できるように、自らの服装の特徴を強調し始めた。その動きが一番強くなったのは、清代末期穿藍人と対抗する中である。その時期、内面的な特徴である信仰より、外面的な特徴である服装が強調され、外部と対抗する中、非漢民族としてのアイデンティティが強化された。しかし、民国政府により民族服装を廃除するという政策ができ、穿青人の服装は政策的に着用禁止になってきた。

それから、服装のアイデンティティへの影響力が弱まってきた。十数年前から、政府の遷移政策や経済発展により、服装が徐々に消滅していた。その代わり、歴史が古く、既に生活と密着している五頭神が改めてアイデンティティ構築の核になり、彼らのアイデンティティを維持させた。

このように、穿青人アイデンティティは、主に五頭神により構築された。その後外部との対抗する中、よりわかりやすい服装がエスニックシンボルとされ、他民族との関係性により、時には漢族としてのアイデンティティを強化し、時には非漢族としてのアイデンテ

<sup>117</sup> 西暦 1875 年-1908 年。

ィティを強化した。異なる時期においては違う方向性が現れたとしても、一個の集団であるという認識は強まった。外面的な特徴である服装は時代により影響力が上昇したり、低下したりするが、内面的な特徴である五頭神はずっと彼らのアイデンティティに影響し続けてきた。現在、服装の影響力が低下することにより、穿青人のアイデンティティを維持させているのは、信仰である五頭神だ。

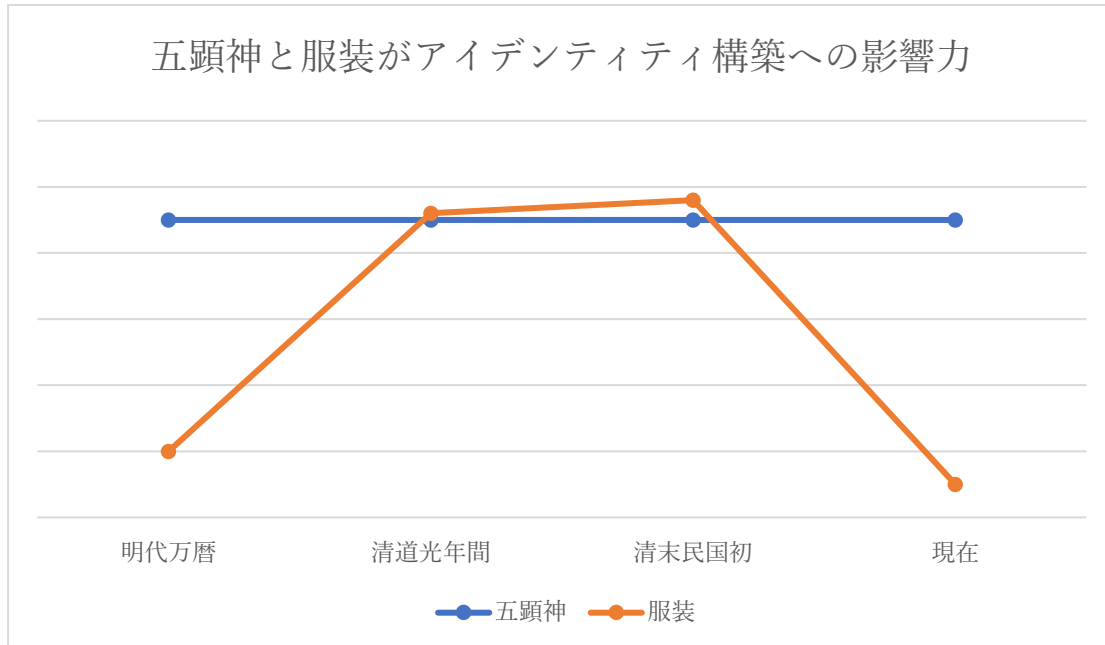


表 1 五頭神と服装がアイデンティティ構築への影響力の変化 筆者作成

## 2. 残された課題

今回の研究では、先行文献を参照し、穿青人のルーツを分析し、民族の二重性が形成された理由を明らかにした。その上で、穿青人アイデンティティはいかに構築され、集団の発展により構築の核はどう変化してきたのかを解明したが、参与観察の時間的、空間的制約があった、そのため、最後に出したその推測は決して間違いがないとは言えない。

例えば、調査の時に、織金県の隣の納庸県での「跳菩薩」は織金県のと違うところがあると気づいたが、時間の制約で具体的には調査出来なかった。各地の「跳菩薩」を比べ、そして各地の穿青人の苗字分布を総合的に分析すれば、彼らの民族属性をより厳密に判断できると考えている。

また、穿青人社会には、宗族という存在がある。宗族は、「同宗」つまり共通祖先からの父系出自の系譜を引く者同士が集まって作る集団をさしている（瀬川、2004、p118）。織金県には、張、陳、李、王の4つの宗族がある。こういった宗族の存在は、穿青人集団の維持及び発展にどのような影響を与えたのかを考査すれば、穿青人をより解明できたと思う。

筆者は、織金県李氏宗族の長老の話を聞き、その李氏宗族が持っている機能<sup>118</sup>を聞いた。また、民族成分変更政策に対する宗族内部の考えも聞いたが、宗族内部には「民族成分変更その行為は支持しないが、反対もしない」という方針を持っている。このように成

<sup>118</sup> 機能は ①教育への支援、②遵法の大切さを宣伝する、③隣人間の喧嘩を調停する、④家族内部の衝突を調停する、⑤事故や災害があった人への経済的な支援。

員への強制力がほぼない、明確な施設<sup>119</sup>も欠いている、成員は織金県県内の各郷鎮に分散居住している李氏宗族は、穿青人アイデンティティの維持にいかなる影響を与えているのか。宗族の成員である李燕萍は、民族成分にこだわらないが、「宗族の長老たちが民族成分を変えなければ、私も変えない」と話した。この話しは、宗族が無形の影響を持っているといえるのだろうか。

今回は時間の制約で、宗族の成員への取材や、李氏宗族の年末会議に参加できなかった。そのため、宗族がアイデンティティに影響する可能性があると感じていたが、どのくらいの影響を持っているのかは明らかにできなかった。この点も、今後の課題の1つになる。

最後に、他の民族と同様に、現代化に伴い、穿青人の文化は衰退してきた。インタビュー結果のように、若者の中には五頭神を知っている人が少なくなってきた。彼らは五頭神を特別なものとして見ておらず、今後五頭神の祭祀が続けられるのかが1つの課題になってくる。また、道士の伝承も1つの問題となっている。道士は子相伝でやっているのではなく、個人の希望があれば、師匠に教えてもらえる。しかし、現在道士の収入が少ないので、道士に従事しようと思う人は少ない。このように五頭神と服装の2つのエスニックシンボルとも消滅したら、その時穿青人のアイデンティティは維持できるのか。他の民族の例から見れば、エスニックシンボルがなくなる際、アイデンティティを維持するために、その集団の知識人は「文化復興運動」を行い、若者に自民族の文化を宣伝する動きがある。穿青人の場合には、民族成分に関して集団内部の意見が統一されていないため、その時になったら、アイデンティティを維持させるために、「穿青人文化復興運動」は行われるのかは1つの疑問である。

---

<sup>119</sup> 宗祠の建造は政府から禁止されたため、李氏宗族支系は宗祠を持っていない。また、固定的な事務所（室）もっていない。

## 参考文献

### 1 次資料

〈未刊行物〉（調査地で筆者収集）

貴州省民族識別工作隊（1986）『貴州省穿青人民族成分重新調査報告』（電子資料）

貴州省民族事務委員会 貴州省公安部（2015）「貴州省民宗委 貴州省公安厅關於印發『貴州省公民民族成份登記管理實施辦法』的通知」（電子資料）

貴州省民族事務委員会（2014）「貴州省民族事務委員会關於開展未定族稱人們共同體的族稱認同基礎工作的通知」（電子資料）

李氏協誼会（2013）「織金県李氏協誼会章程」

苗春亭（1981）「苗春亭同志在全省民族識別工作座談会上的讲话」（電子資料）

全国人民代表民族委員会編（1955）『貴州省穿青人民族成分調査報告』（電子資料）

中華人民共和国公安部（2003）「公安部關於對貴州省革家人和穿青人居民身分証民族項目内容填写問題的批復」（電子資料）

中華人民共和国国家民族事務委員会 中華人民共和国公安部（2015）「国家民委 公安部令第2号：中国公民民族成分登記管理辦法」（電子資料）

### 研究論著

〈日本語〉

稲澤努（2016）「第1章 水上居民地の形成」『消え去る差異、生み出される差異—中国水上居民のエスニシティ—』東北大学出版会、pp31-84

王柯（2017）『多民族国家 中国』岩波新書、第7刷

鈴木正崇（1993）「創られた民族—中国の少数民族と国家形成」飯島茂編『せめぎ会う民族と国家—人類学的視座から』、アカデミア出版会、pp211-238

瀬川昌久（2004）「第三章 中国社会と親族の絆」『中国社会の人類学 親族・家族からの展望』、世界思想社、pp118-119

曾士才（2012）「民族の名のりと移住—貴州省黔东南苗族侗族自治州市の事例から」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、pp59-72

塚田誠之（1998）「民族集団はどのように作られるのか—『屯堡人』は漢族か？」可児弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編『民族で読む中国』朝日新聞社、pp45-74

塚田誠之（2001）『『屯軍の末裔』たち—貴州における移住と民族の生成』塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ』平凡社、pp273-292

トーマス・ハイランド・エリクセン（2006）「第四章 エスニック・アイデンティティとイデオロギー」トーマス・ハイランド・エリクセン著 鈴木清史訳『エスニシティとナショナリズム 人類学的視点から』明石書店、pp120-153

ハス額爾敦（2008）「社会主義中国における「民族」概念の政治性と国家政策—四川 雲南ルグフ地域の納日人集団を例—」『多元文化』第8号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、pp183-195

松原正毅編（2005）『新訂増補 世界民族問題事典』、平凡社

松本光太郎（1995）「雲南の彝語支諸集団の民族識別をめぐって」上・下『東京経済大学人文科学論文集』第99号、101号、東京経済大学人文自然科学研究会

松本ますみ（1999）『中国民族政策の研究—清末から1945年までの「民族論」を中心に—』多賀出版

丸井ふみ子（2012）「アイデンティティ研究の動向：異文化接触・言語との関係を中心

に」『言語・地域文化研究』第18号、東京外国語大学大学院、pp193-209  
毛里和子（1998）「第三章 民族は作られる＝民族識別と中華民族論」『周縁からの中国—  
—民族問題と国家』東京大学出版会、pp55-90

<中国語>

- 陳宏枢編（2004）『穿青人歴史与文化』、織金県政協文史資料委員会  
鄧啓耀（2011）『民族服飾：一種文化符号＝中国西南少数民族服飾文化研究』、雲南人民  
出版社 雲南大学出版社  
費孝通（1951）『兄弟民族在貴州』、三連書店、p9  
費孝通（1980）「關於我国民族的識別問題」『中国社会科学』1月号、pp147-162  
費孝通（2014）「序 民族研究＝簡述我的民族研究經歷与思考」『中華民族多元一体格局  
（修訂本）』中央民族大学出版社、pp1-17  
貴州省織金県地方誌編集委員会（1997）『織金県志』、方誌出版社  
貴州県情編集委員会（1992）『貴州県情』、貴州人民出版社  
李思睿（2016）「中間群体：去辺縁化抑或自我辺縁化—以貴州屯堡人、穿青人為例」  
『貴州社会科学』12月号、pp98-101  
民族民間舞蹈集成織金県卷編集会（1991）『中国民族民間舞蹈集成 貴州省畢節地区 織  
金県卷』、中国 ISBN 中心  
莫非（2008）「即将消失的僇人（西藏少数派報告—僇人）」『華夏地理』3月、pp152-171  
譚其驤（1982）『中国歴史地図集』、中国地図出版社  
楊然（2006）「穿青人研究」（中央民族大学、博士論文）  
楊庭碩・潘盛之編（2004）『百苗圖抄本匯編』、貴州人民出版社  
周成勳（2013）「穿青人民族認同問題研究」（貴州民族大学、修士論文）  
朱偉華（2011）「貴州移民文化形態的留存与變異＝“屯堡人”与“穿青人”文化符碼比  
較」『文芸争鳴』第15期、pp129-132

ウェブサイト

- BBC 中文網（2014）「透視中國：穿青人，民族識別的遺留問題」  
[https://www.bbc.com/zhongwen/trad/china\\_watch/2014/05/140521\\_china\\_watch\\_ethni  
cgroup](https://www.bbc.com/zhongwen/trad/china_watch/2014/05/140521_china_watch_ethni_cgroup)（最終アクセス2019年6月26日）  
澎湃新聞（2014）「只占1.2%，穿青人為何不願改為漢族？」  
[https://www.theppaper.cn/newsDetail\\_forward\\_1253793](https://www.theppaper.cn/newsDetail_forward_1253793)（最終アクセス2019年6月  
26日）  
OSGeo 中国（2019）「中国清朝時期貴州歴史地図」  
<https://www.osgeo.cn/map/m05ca>（最終アクセス2019年11月25日）



### 織金縣穿青人分布情況(表一)

乡(鎮)	人口	男	女	分布情况
城关鎮	14169	7465	6704	西前居委 和平居委 174居委 星秀田村 鱼塘村 新寨村 克媽村 古佛居委 新北居委 城北居委 花紅村 黑石村 平寨村 沿河居委 東山村 楊柳村 桂花村 岩脚村 双堰居委 玉屏居委 西山村 干河村 双龙村 田坝村 太平居委 城南居委 四方村 荷花村 独山村 大坡村 星秀居委 清泉居委 西湖村 大寨村 化垮村 白岩村 西环居委 紫竹居委 北門村 水依村 冷坝村 独店村
桂果鎮	10564	5561	5003	桂花居委 猫场村 馬场村 克窩村 小牛场村 岔河村 阿烈村 打麻厂村 东紅村 联兴村 兴平村 新华村 果底村 水坝村 綺陌村
牛场鎮	14064	3740	6724	文城居委 平山村 大冲村 沙沟村 河坝村 半处村 堂房村 鼠朵村 后坝村 半坡村 来法坝村 二坡村 井沙村 大坝村 头坡村 大营村 水管上村 管龙村 水城村 灯光村 保伊村 群营村 垭垅村 群光村 岩寨村 群裕村 张家寨村 高山村

<sup>120</sup> 出典 陳宏樞編 (2004) 『穿青人歷史与文化』。

续(表一)

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
猫场镇	14169	2243	1926	团结居委 和平村 石板村 高克村 密上村 大寨村 大水田村 齐心村 新寨村 四甲村 川洞村 云峰村 国江村 风平村 龙潭村 红星村 新联村 扩兴村 白云村 岩脚村 群兴村
化起镇	10846	5783	5063	新化居委 红光村 钟山村 果底村 罗家寨村 大山村 安全村 新祥村 胡家寨村 鱼塘村 和平村 化起村 大田边村 九甲村 大平子村 老鹰村 老乌山村 布堤村 六甲村 龙家坝村 毛栗寨村 雄鹰村 木弄村
龙场镇	2162	1143	1019	腾龙居委 太平村 六花村 青山村 新龙村 高山村 双山村 金家坝村 新华村 美满村 幸福村 中心村 新民村 民族村 偏坡村 阳光村 以支村 平寨村 管口村 大寨村 营仓村
八步镇	12542	6690	5862	碧云居委 碧新居委 田坝村 水塘村 院墙村 山脚村 桶井村 土锅村 阿作村 营盘村 新华村 瓜仲村 支都村 水东村 荣源村 沟边村 新利村 利民村 马坎村 坪上村 同心村 八步村 沙冲村

续(表一)

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
以那镇	17650	9264	8386	金塔居委    营松居委    凉山村    化泥村 化合村    莲花村    茶林村    五星村 沙田村    光星村    松树坪村    三合村 林家寨村    箐口村    龙兴村    大寨村 木兴村    以那村    松林村
三塘镇	5060	2691	2369	新荣居委    猴场村    团结村 后寨村    岩洞村    马场村    小鹿塘村 水沟村    地凼村    前锋村    布利村 少仲村    上寨村    下寨村    大方寨村 联合村    穿洞村    鱼多凼村    松树坪村 小岩村    干河村    落处村    桃园村 黑箐村    花牛寨村    哨岗村    野乌村 街上村
阿弓镇	8609	4548	4061	大寨居委    屯上村    乐丰村    夏单村 下寨村    大桥村    以麦村    官寨村 化董村    依聿村    尚寨村    吹聿村 狗场村    长地村    联合村    金鱼村 大田村    吊井村    上寨村
珠藏镇	10926	5872	5054	新隆居委    珠藏村    饶堕村    牛洞村 鱼塘村    么冲村    中部村    骂丫村 链子桥村    先锋村    前进村    龙河村 一心村    华山村    龙山村    银山村 群丰村    木桥村    骂陇村    新庄村 青山村    凤凰村

续(表一)

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
三甲乡	5503	2930	2537	三甲村 马家庄村 大夏村 箐脚村 木夏村 佳夸村 皎塘村 裕民村 木里村 绮结河村 石头村 涌湖村 尖山村 干坝村
自强乡	4715	2538	2177	自强村 堰塘村 二坪村 坡头上村 菜坝村 大冲村 化落村 山口村 支东村 寨脚村 桥上村
大平乡	2095	1172	923	大平村 石板村 中寨村 新黔村 新场村 新河村 新平村 前平村 前丰村 箐拢村 岩脚村 花坡村 群建村
官寨乡	4752	2518	2234	官寨村 大寨村 屯山村 化塔村 尖山村 黄泥村 白马村 萝卜村 麻窝村 青山村 联明村 茅草坪村 民生村 凤岗村 红岩村 化窝村
茶店乡	7606	4006	3600	先锋村 上寨村 以补村 以冲村 跑瓦村 鸭瓦村 鸭院村 桂花村 团结村 渡口村 红艳村 八寨村 磨大村 群丰村 海马村 洞口村 安乐村 湖坝村 龙井村 前进村 山林村 大营村

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
金龙乡	10429	5506	4923	老街村 细木村 中寨村 关心村 金果村 黄山村 新七村 石板村 鞍山村 中坪村 综合村 包管村 落作村 齐心村 建福村 大竹林村 关法村 复兴村 新立村 石兴村
后寨乡	3329	1768	1561	花树村 熊家寨村 小桥村 务安村 偏岩村 高墩村 路寨河村 前进村 马家田村 三家寨村 大炉塘村 坪寨村 麻窝寨村
鸡场乡	3329	1768	1561	鸡场村 干河村 炸瓦村 白泥夏村 旧税村 修文县村 坡头上村 丫口寨村 化启村 依梭村 白泥塘村 格嘎村 务卜村 大湾村 保脚村 大于田村 茶树村 木贺村 大坡头村 小屯脚村 兴寨村 北京底村 以角细村 鸡坡村
中寨乡	7474	4067	3407	羊场村 中寨村 响水村 核桃村 水头寨村 石龙村 青山村 普作村 石丫口村 沙坝村 金鹅村 大院村 岭岗村 小院村 铁厂村 马路河村
绮陌乡	7676	3963	3713	陡岩村 三架山村 中坝村 中营村 墨峰村 平桥村 二塘村 金山村 河坝村 阿烈村 轿子村 箐脚村 岭岗村 布寨村 大沟村 兴荣村

续(表一)

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
普翁乡	4936	2647	2289	普纳翁村 五星村 白泥坡村 新民村 大街村 龙潭村 小龙场村 化落村 新峰村 杨柳河村 狗场坝村 白岩脚村
实兴乡	7389	4022	3367	新场村 石备村 石底村 小干坝村 鸣寨村 杉树寨村 大平坝村 补蚌村 上坝村 下坝村 白龙村 龙井村 大地村
马场乡	11547	6069	5478	马场村 文峰村 大陌村 台子村 马家屯村 鸡场坝村 布底村 陈家寨村 过弓村 小河村 关上村 中心村 营上村 龙井村
上坪寨乡	1821	960	861	平寨村 八寨村 建强村 格支村 上水村 中山村 坡脚村 马场村 五甲村 秋哨村 碗厂村 青峰村 建明村 双明村
管合乡	3274	1789	1485	煤厂村 补花村 光明村 三甲村 丫口田村 龙场村 沙坝村 二甲村
纳雍乡	3124	1657	1467	爱国村 和平村 联盟村 一心村 布苗村 六阴支村 八耳岩村 顺山村 三岔土村 鼠场村 上红岩村 新普村
板桥乡	12538	6533	6005	永久村 永兴村 中心村 付阳村 兴发村 和平村 幸福村 龙井村 跃进村 白栗村 红光村 箐龙村 玉龙村

续(表一)

乡(镇)	人口	男	女	分布情况
白泥乡	9059	4973	4086	白泥村 起马村 水管村 新黔村 联合村 喻家坝村 大坝村 三合村 银碧村 先锋村 前进村 新寨村 大树脚村 那里村 保木村
少普乡	6488	3353	3095	大寨村 联盟村 街群村 水塘村 新地村 白泥坝村 四角田村 湾河村 文笔村 喇叭河村 小河村 白坟村 中山村 平寨村 金钟村 么岩村 安民村 长冲村 新塘村 迎丰村 林山村 龙井村 丙寨村 狗场村 菜林村
熊家场乡	6271	3308	2963	群潮村 高粱村 蒙坝村 马店村 白马村 化作村 大桥村 大寨村 陶家洞村 糯冲村 磨石坡村 石马村 屯口村 宝山村 木汪村 干河村 川洞坝村 何家寨村
黑土乡	3068	1604	1464	红星村 道子村 金鸡村 联合村 尖山村 箐口村 木利村 龙洞村 破岩村 马场村 梭刚村 花坡村 打括村 龙潭村 三坝村 团结村 岩上村 梭罗村
合计乡	239369	127091	112278	

## 纳雍县穿青人分布情况表(表二)

人口	男	女	分布情况
224840	117127	107713	纳雍县
37391	19498	17893	雍熙镇
13470	7057	6413	中岭镇
12845	6849	5996	阳长镇
901	464	437	维新镇
8495	4338	4157	龙场镇
6830	3436	3394	乐治镇
15816	8083	7733	王家寨镇
12382	6305	6077	百兴镇
10468	5516	4952	张家湾镇
15669	8109	7560	勺窝乡
11122	5937	5185	新房乡
1431	735	696	库东关乡
7990	4138	3852	董地乡
10569	5435	5134	寨乐乡
7975	4084	3891	化作乡
11013	5823	5190	老凹坝乡
11757	5215	5542	沙包乡
8312	4343	3969	水东乡
10891	5693	5198	曙光乡
756	395	361	姑开乡
348	189	159	羊场乡
2252	1211	1041	锅圈岩乡
2025	1086	939	昆寨乡
770	371	399	左坞戛乡
3362	1817	1545	猪场乡